愛國婦人會機關　愛國婦人會の目的は遺族及癈兵を救護するにあり

愛國婦人

毎月五日二十日發行
一部金參錢　一ヶ月金六錢　半年分參拾六錢　全國無郵税料
廣告料一行六拾錢
本號全部禁轉載
發行所　東京麹町區（牛ヶ淵公園）愛國婦人發行所
發行兼印刷人　山澤俊夫
編輯人　手島益雄

社說

道樂

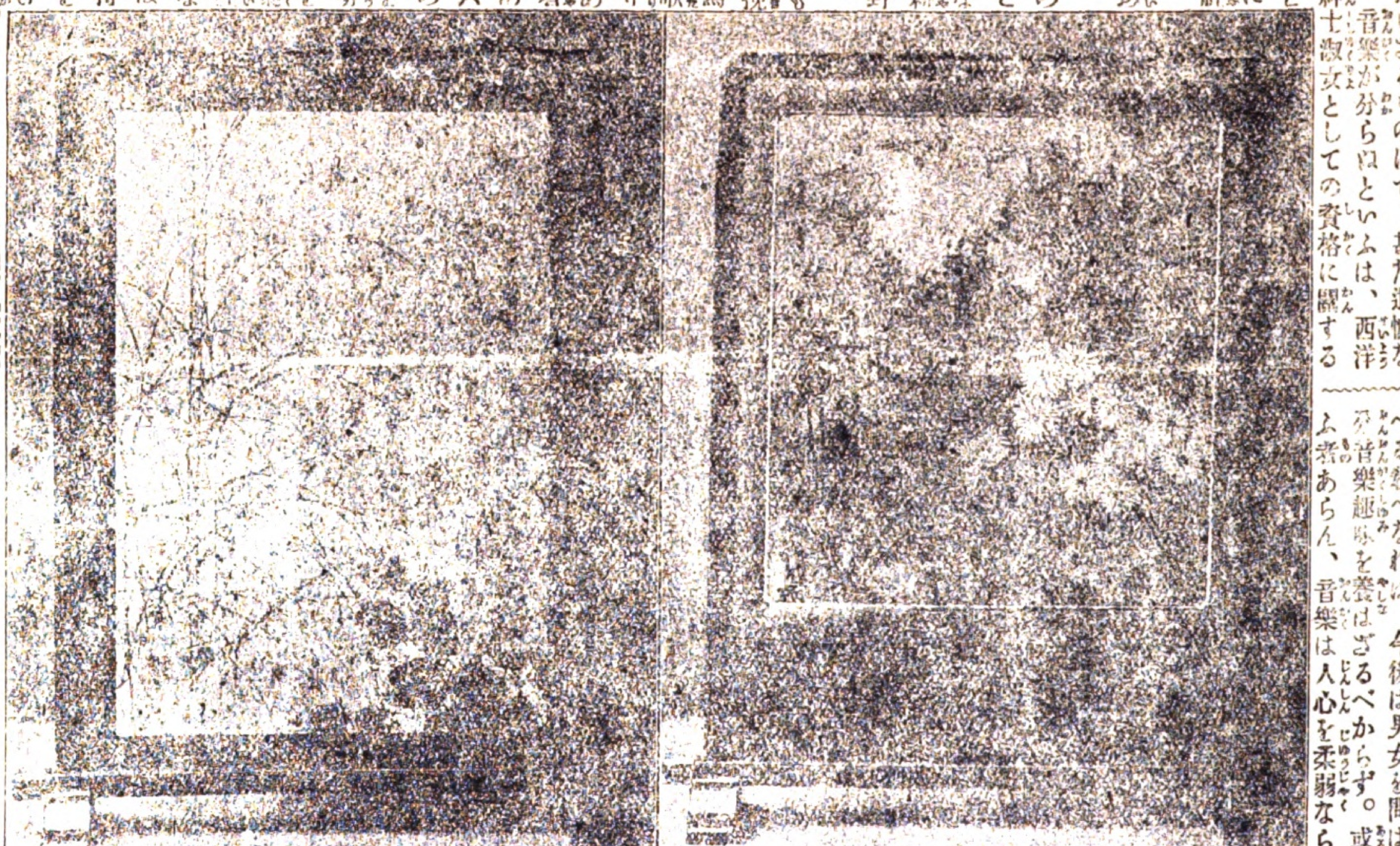
道樂とは本業以外の好きなる道をいふなり、又嗜好といふも可なるべし。この道樂には様々ありて、大概の人には一二の道樂はあるものなり。我には許せとて敷島の道に耽りたるは、高尚なる道樂なり、賭博飲酒等に耽る青年は、道樂息子と呼ばれて、親の命を縮むるものなり。斯くの如く道樂には善きも惡しきもあるなれば、道樂なりとて一概に排斥すべきにあらず、品に由りては、寧ろ道樂あるこそ望ましけれ。何等道樂なき人は、乾燥無味殺風景といふの外なし。

人は其本業よりも、寧ろ其道樂に由りて、其如何なる人なるかは、良く分るものなり。眞によく人を知らんと欲せば、先づ其道樂を問ふべし、ラスキン曰く、汝の好む所を余に語れ、余は汝の何者なるかを語るべし、試みに往來に出てゝ、出遇へる男女に、其好む所を問へ、もし彼等にして正直に答へんか、彼等の心身は悉く知り得べきなりと。貴君は何を好まるゝか、余は煙管と猪口が最も好きなり。煙草は一寸も口より放すこと能はず、酒は毎晩一升は飲まねと……、分りたり、分りたり、余は斯る煙突の如き人、猩々の如き人を好まざるなり。貴孃は何を好み給ふや、私は駝鳥の羽毛の襟巻をして、ダイアモンドの指環を二ツ三ツして、人中に出るのが、好きなり、それにて澤山、忘れても斯る婦人に家政は托すべからず。奥さんは何がお好きにや、私は花札を引くのが飯よりも好きなり、時々は宅の友人や奥さん達が見えて、夜明しをすることあり、それから……、宜し、宜し、呆れた人かな、以來交際は眞平お斷りなり。もし其人の道樂を問ひて、此の如き答をなす者は、其如何なる位置にあり、如何なる名聲を有するを論ぜず、吾等は其尊敬すべき所以を知らざるなり、蓋し道樂は即ち其人なればなり。

もし婦人にして竈に光澤あらしめ、整頓せる室に於て、子を抱きて夫と話すを、樂みとする者あらば、この婦人は善き婦人なり、出入の髪結、八百屋を捕へて、長話をする餘所の夫人を淺間敷思ひて、暇あれば、書を讀み、技藝を覺へんと心掛くる婦人は、感心なる婦人なり。其自己の費用を節して、貧なる者、病める者、傷ける者を惠み、或は孤兒の教育、勞働者の慰安等の爲に盡すを道樂とするに至ては、道樂の最も純潔にして、高尚なるもの、一般の婦人が、家庭の事を忘れざると共に、斯る自己の修養、慈善、博愛の事を樂みとして努むるが、文明國の婦人といふものなり。元來道樂とは道を樂むの義にて、斯る事を行ふこそ、眞に道樂の本義に叶へるものと知るべし、我等は我が國民が一般に惡しき道樂を捨てゝ、良き道樂を取らんことを望み、殊に婦人に向て從來稀れなりし前記の如き道樂を勸むるものなり。

音樂

音樂は、あらゆる美術中にて、最も直接に人の精神を感動せしむるものにして、實に人生の高尚なる享樂なり、されば音樂の趣味を解せざるものは、人生の美しき賜物に預らざるものにて、甚だ遺憾なる事なり。音樂が分らぬといふは、西洋にては、紳士淑女としての資格に關するほどなれども、我國にては下等社會よりも、却て中流以上の者に、音樂趣味の缺乏せるこそ不思議なれ。野に耕す者に、野良歌あり、木を伐るものに、木挽歌あり、馬子に馬子歌あり、子守に子守歌あり、勞働者に浪花節あり、二六時中各其の職業に力を與へ、其勞苦に慰安を與ふ、音樂は彼等の生命の一部なり、彼等は、道徳を維持し、心情を美化せしむる最大の力なり、然るに中流以上の社會に至ては、全くその反對にして、家庭に唱歌の聲を聞かず、絲竹の音を洩さず、魚の如く沈默にして、荒野の如く寂寥なり、これ異常の事といはざるべからず、畢竟從來の教が、身分ある者に音樂を忌みたるの結果たるべしと雖も、そは間違へる教へなれば、今後は男女を問はず充分音樂趣味を養はざるべからず。或は云ふ者あらん、音樂は人心を柔弱ならしむるが故に、宜しく之を遠ざくべしと。音樂は決して左るものにあらず、昔の戰爭に陣太鼓を打ち、法螺の貝を吹きたる、今日の戰爭に軍樂隊の吹奏ある、士氣の鼓舞にも、音樂の必要なる活ける實證にあらずや、其他大砲の轟音、一齊射擊の爆聲みなこれ音の力によりて、勇氣を附くるものなり。音樂は撰擇其宜しきを得れば決して人を柔弱ならしむるものにあらず、否音樂こそは人に元氣を與へ、精神を快活ならしめ、又品性の陶冶に大なる力あるものなれ。然るに今日學校に唱歌の科あれども、多くは學校用又兒童用の唱歌にして、社會にありて大人が歌ふべきものにあらず、「あんまり遲い兎さん」など、口髯を生やし、勝山を結へる者が歌へるものならんや、偶々俗曲を心得たる者も、集會、又は料理屋等にて、友に誇り、妓に讃められんための俗曲にて、家庭に在りて妻子と共に歌ふて樂むためにあらず、本末を顛倒せるものにて、家庭の無趣味殺風景なる所以なり。されば今後は音樂の改良と共に、一般に男女が音樂に對して趣味を有し、到る處家庭に樂の音を耳にする樣ならざるべからず、正月に加留多が讀まれ、ドタバタの音はすれども、一向いみじき音樂の家庭より洩れざるを殘念に思ふの餘り、こゝに一言す。



韓國皇室御慶事に付き愛國婦人會より献納の衝立

藝者

日本人は一體無藝にて、家庭は勿論、集會の節にも、家族又は會員自ら藝を出すこと能はずして、藝人を呼び來りて興を助くるが常なり、隨て興も薄く、又男子が往々内を外にして、妓などに戯むれ、延て家庭の折合ひ面白からざるなどの事あり、畢竟無藝の致す所なれば、今後の婦人は何か藝事を覺へて、晩食後の家庭をも樂ましめ、交際をも圓滿愉快ならしむるの心掛けなかるべからず、尤も藝にも色々あり、手踊り、猜拳、百面相、劍舞なども、藝には相違なきも、婦人の藝としては先づ音樂が一番上品にして、樂みも大なれば、早くこの音樂を心得て、婦人が一般に違ふた意味にて、上品の藝者とならんことを望むものなり。

電話番町五百二十番

◎本號には愛國婦人會新年互禮會の光景を寫眞版附録とす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

論叢

現代婦人の長所と短所

評議員　廣岡淺子

一體婦人が消極方面に長じて、積極方面に短なることは、自然の配劑より來れる當然の結果にして、其天職とも云ふべきであるが、此消極方面に於て、現代婦人は果して完全に其長所を發揮して居るかと云ふに、遺憾ながら然りと云ふことを得ぬのである、數へ來れば、現代婦人の長所としては、忍耐あり、從順あり、慈愛あり、細密なる注意力に於て、優雅なる氣風に於て、殊に顯著である、然しながら、是等の長所たる、幾多の短所の伴ふありて、隨分長短何れが其本性なるかを疑はしむる場合多々あるものである、忍耐從順の極は、卑屈となり、依賴心となり、義務的に強壓的に、己を枉げ來れるの結果は其本性を癖がめて、猜疑心となり、偏屈心となり、虛榮心ともなる、情に動き易き性質は慈愛、慈善の特長を表はす代りに、徒らに感情に走りて常識を失ひ、常道を破らしめ細密なる注意は一般の注意を缺き、優雅なる氣風は實界に疎く、空界に親ましむる等、枚擧に遑あらざる次第でありますが、之を要するに現代婦人には根本に於て大なる短所あるが爲めに、其の自然に有する幾多の長所を沒却するに至るのであらうと思ひます。

凡そ人は智、情、意の三者を平等に具備せざれば完全なる人格を成すことは出來ぬのである、何れが過ぎても弊害が生ずるのである、少なくも人として三者に大なる缺陷なきことを要するのである、然るに現代婦人は情に於ては過度に發達し居るも、智意の二者に至りては甚だしく缺けて居る、智に於ては未だしもであるが、意に至りては殆ど皆無と云ふも過言にあらず、是即ち現代婦人をして幾多の短所を有せしむる只一の主因である。

抑も現代婦人が、斯く情に於てのみ極度に發達せるに至れるは、一朝一夕の事にあらず、古來我國の風俗、習慣、敎育、制度が一方には盲從的從順を強ひて、一方には專ら情的發作を助長せしめし結果に外ならず、即ち未婚時代には父母に、婚嫁しては夫に盲從的從順にして、其間子とし妻とし母とし所謂女らしき愛情に富めば能事終れるなり、而して其智育に至りても又此れより割出され、女子の從順を傷けざる範圍に於て僅に其消極的天職中卑近なる一部を盡し得れば足る程度に過ず、即ち情的敎育は十二分に之を受け、智的敎育も其蔭を見ることを得るも、意的敎育に至りては殆ど皆無の有樣で、否寧ろ意思は女子には害あるも益なきものと迄も思惟せられて居たのである、斯かる古來の風俗敎育が、女子に一種の特性を馴致し、今日に於ては殆ど遺傳的に女子の本性と疑はるゝ迄に發達するに至つたのである、今日女學生諸子の課程に於ても此の傾向は明瞭である、即ち文學とか、音樂とか、手藝とかは一般に嗜好せられ、又其進歩も速かなるも「學問」に至りては其嗜好力も乏しく解釋力も鈍いものである、是即ち意志力の缺乏せる證據にして情力により智力によりて得たる者を、意力によりて綜合すると云ふ力が女子には缺て居ると云ふことを表白するのである、一言にて云へば女子の長所は情力より出たる事に存し、其短所は智意殊に意思力の缺乏に胚胎するのである、忍耐は美德なり、然れども何でも忍ぶのが美德ではない、世に忍んで惡しき場合が多々あるのである、從順は美德なり、然れども其事の何たるに係はらず只盲從すると云ふことは決して美德とは云ひ難し、何事にせよ先づ意思力に訴へ、之れは忍ぶべきなるか、從ふべきなるかを考慮し、善事なれば勿論服從すべきも、假りにも疑問を抱かば之れを明にし、忠告すべきは忠告し、諫むべきは諫むるが、從順とか、忍耐とかの美德なる所以の附帶條件である、何事に係はらず感情に走らず、冷靜なる頭腦を以て、明確なる意思力の判斷を待たば、猜疑何ぞ起るべき、虛榮、偏狹悉く地を掃ふべきである。强健なる意思にして存ずるあらば、徒らに情の爲めに左右せらるゝが如きことは無く、無暗に愛に溺れたり博愛慈善の眞義を誤まるが如きことは無いことになり、細密なる注意は一般的注意と相待つことも分り近く實世界と親むに至るのである。

智、情、意の三者中意思力の養成が最も困難なる者で、智情に於て著しく發達を遂げた人も、此の點のみには充分なる發達を遂げ能はざるが一般である、之れが養成に專念せる男子にして然り、况んや之れが養成を全く等閑に附せる女子が此缺點あるは其の所である。

近來女子敎育の緊切なることが、一般に認識せられ、公、私、共幾多の設備が現はるゝに至り、又其敎育方法も舊來の病根を一掃して意思力の養成に傾くに至れるは喜ばしきことである、然し前陳の通り未だ學生諸子が、詩的方面を嗜み學問に親まざるの一事を見ても前途遠い感があるのである、故に敎育者も被敎育者も能く此點に鑑み、此の意思力の養成と云ふことに全力を注がれんことを希望す。

家庭に於ける禁酒問題

法學博士　小河滋次郎

酒が人間に及ぼす害は非常なものであるが家庭に於て主人が酒を飲むと云ふ事柄よりして如何なる害毒が起るかと云ふに其結果を數へ立つれば際限がないが第一は生理上の被害である酒を飲む親に強い子は多く出來ないのは事實である第二は浪費である酒が源因となつて浪費する事が多い早い話しが主人が酒を飲むが爲めに食膳を別に調へ家內中共同の食事を採る事が出來ないで別の肴を作らねばならぬと云ふ其一事既に家庭に於ける浪費の緒である第三には一家の平和を破る事又酒が多い日本では爭ひを調和するが爲に酒を用ゐるが其度毎に益々平和を破る事が多い第四に時間を費す事である主人が酒を呑むと云ふ一事の爲に家庭の人に多くの時間を費さす事になる第五は子弟の爲に惡慣習を作る親が酒を呑めば其子も之に見習ひて酒を呑む慣習を付ける事になる第六は犯罪の原因を作るこれは私の最も專門に研究して居る事柄でありますが酒が間接直接の媒介となつて犯罪を起す事が頗る多いのである其他社會に在つて成功を遂げんとするの希望を有するものは酒を用ゐては競爭に打勝つ事が出來ぬのである外國あたりの實業家の內にも酒を用ゐる人が多い之れからは何れの方面ても腦髓の緻密なものでなくては役に立ぬが酒を呑んでは到底健康なる身體と清透なる精神とを常に持つて居ると云ふ事は出來ないのである日本ては婦人は酒を呑まないが西洋では婦人でも倘酒を呑む者が多い又露國の如きは上流社會程多く酒を飲んで居て最早や回復する事の出來ない程度に立至つて居る而し日本には幸ひにして強き酒を用ゐず上流社會に於ても左迄汚れて居らぬから上流社會の家庭からして家庭內に於て酒を一切禁ずると云ふ事にしたならば日本社會をして益々發達進歩せしむる事が出來ると思ひます且つ禁酒會などの組織は宗敎的關係のあるものでなく社會の風敎を維持する爲に必要なのであつてこれが會員となつて主として働く人は婦人が最も功を奏する樣に思ひます私共も外國の禁酒會員の人より依賴を受けて宗敎に關係のない人て禁酒運動の爲に熱心な人を求めて呉れとの事でありましたが日本ては其人を見出す事が出來ぬのを甚だ殘念に思ふて居ります。

婦人と交際法

評議員　仁尾繁子

從來耳慣れて居る一種の交際家と云ふ言葉を靜に考へて見ますと氣輕で、口輕で、氣轉がきいて、どうしても少し輕薄な人の意味を含んで居る樣に思はれます、殊に近頃交際術とか交際法とか喧しく申しますが、私の考へでは、凡て人と人との交りの極致は眞心が根本であると思ひます、勿論場所に副れる事も必要でありますが、人に對して親切氣のない人の言葉や行爲は其方法が如何に巧みであつても決して人に快感を與へるものではありません。

元來人と交際するに當り、己れが意見を主張した時に他人と衝突する人と、又全く爭はず如何なる場合も唯々諾々で更に自分の主義を發表せぬ人との二種あります、此二者の內交際法としては何れを取るかと云へば私は前者を是とするのであります、何人も人と交はりて全々衝突をせぬと云ふ事は決してないものであります、殊に會等の議事などには滿場一人の賛成者を得ずとも飽くまで自分の意見を主張せねばならぬ場合もあります、斯る時は例令其意見が其當時採用されずとも若し云ふ所が眞理に叶つた事であれば決して人より侮りを受くるものではありません、之に反して何事も他人の意見次第になる人は表面甚だ穩にて何人の感情を害せぬに係はらず左程人から重んじられず時には却て輕蔑を受くるものであります、素より交際は平和を意味して居りますから常に人と爭ふ事は甚だ宜しくない事でありますが、然し時と場合によりては全然人と反對しても善と自確する主義は充分發表し得るだけの氣力ある人てなければ社交界に永く重んぜらるゝ事は出來ぬかと思ひます。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

小説

母の面影

一ノ瀬　はつ子

あゝ又寂寥の夕となつた。

僕はさまよひ出てゝ例の淋しい川邊に立ちつくねんとして考へはじめた、否むしろ考へまいとしても、様々の記憶が、彼れよりこれ、これより彼れと、幻影の如く現はれては消え消えては現はるゝのである。

僕はこの川邊をさまよひ、流れに添ふて歩をうつした事をも幾度であつたろう、寂寥の夕をこゝに泣いたこと決して一再でない、けれども……けれども又これほど云ひ知らぬ思にせまられた事は未だ曾てないのである。

あのなつかしい母を措き、あの樂しい我が家を捨てゝ笑つて故山に背きし以來……

然だ僕は笑つて故郷を出た。

戀の香の甘きに醉ひ、なつかしと思つたちづ子と手に手を取つて、いづこ如何なる山川も、君と共ならば厭ひはせじ、如何なる世の苦しみ惱みも二人一緒ならばと思ひ思はれ誓ひ誓つて、戀は嬉しきもの樂しきもの、あらゆる世の汚れの中に只これのみは氣高く清く神聖なるものであつて、これが唯一の光明である、僕はこの外に何にも要らない、と二人はもう何も彼も忘れてしまつた。

さてはる〳〵東都に來て實際に浮世の風にもまれて見れば、どうかして暮されると信じて居る僕の自信は目茶々々に打こわれてしまつた、世の中といふものは考へた程單調でない、胸に描いた折角の心算も多くは先方からはづれ勝である。

またたく間に金も使ひつくし、僕はあせりにあせつて然るべき口もがなと探し回つた、宿の主人のすゝめに二三の口入屋にも出入したが一向要領を得ぬ。

僕は獨思案にくれて居ると、どうだらう、ちづ子はいつの間にか金縁目鏡の、のつぺりした學生と、くつついて僕を措いて逃げてしまつた。

腹も立てばくやしくもある、憎くゝもあれば怨みもある、えゝッからなれば破れかぶれの頬冠だ、まゝよ浮世は面白おかしく暮すに如かずと、到々この、みすぼらしい姿となつてしまつた。

物置の様な木賃宿にごろ〳〵して毎日〳〵勞働に體を叩き上げる、三度〳〵は一膳飯屋の暖簾を潜つて辻の車屋と卓をかこむ、よくも思ひ切つて堕落した者だと、時折は自分で自分があさましくなつた事もある。

今夜もまた例の如く一膳飯の暖簾を潜つて這入ると既に二三人の先着者がある、その一人は女で而かも四つ位の子をつれて居る、物珍らしげに僕は一寸その方を注視した。

すると、どうだらう、男か女かわからぬ様な汚ない子だけれども母の心になつたなれば何よりも可愛いと見えて、皿の魚の頭と骨ばかりを自分がしやぶつて肉は皆その子にやつて居る。

「あゝ、あれても子が可愛いと見える。」と心に低語した僕は、ふと故郷の母の事を思ひ出すと、我知らず戀しくなつて箸を捨てゝぼんやりとゝを、さ迷ひ出たのである。

＊　＊　＊　＊

「母の愛とはあんなに美しいものであらふか。」

僕は再び繰返して、あの女を思ひ、今更に母の面影を想起した、あゝ母様、母様、母様は僕を愛して下さつた、幼い時分の事は云はずもがなである、大きくなつて僕が中學校に通ひ出して、惡くまれ口を言ふやうになつても母様の愛は變らなかつた、否益々深く〳〵なるのみである。

あゝ然だつた僕が小學校に行く頃は、遠い山路を毎朝早くゆかねばならぬので、母様は暗い中から起きて仕度をして、そして僕を起して、つらからうけれども精ちやん辛棒なさいよね、とあのなつかしい聲で優しく慰めて下さつて又僕の頭をなでゝは

「大きくなつて立派な人になるんですよね精ちやん、ようござんすか。」

とニッコリ樂しさうに仰しやるので、僕は大好きの母様に、かう云はれる毎、何とはしらぬ勇氣が與に心の底より湧き出るよう覺えた。

あゝそれだのに……それだのに僕は、……あゝどんな立派な人となつたか、優しい母の懐よりさまよひ出てゝ、こんな、みすぼらしい男となつたてはないか、轉々流浪の身となつて何が立派だ。

あゝあの女でさへ美しい母の心は有つて居る、世の中に母の愛程、いつはらず、飾らず、堅い深い、神聖なるものがあるであらうか、戀は、ともすればさめ易く、友は、ともすれば背かんとする、花は落ち月はかくれて、物皆變りやすき世にあゝ唯母様は……。

僕はその母様の懐を我からのがれて、燃えては消ゆる戀のうつゝにあこがれ迷ひつ、つひにこんな、境界にと蹴落されてしまつた、何を怨み、何を悲しむでもないが、今は只母様がなつかしい、その笑のあふるゝあの家がなつかしい、故郷がなつかしい、僕はモウ泣いた。

泣いて、そして歸らうと思つた。

母様は、どうして居らつしやるだらう、僕の事を案じて今泣いて居らつしやるではあるまいか、あゝ歸る〳〵、歸つてこの罪をわび不孝を謝して

と思ひ定めて頭を上げた、ふと見ると向の方から、さも、むつまじ氣に歩いて來る男女がある、次第に近く〳〵近よつて、川添の家よりもるゝ燈火の光にぱつと其顔があかるくなつた、と僕は驚いた、二人はちづ子と彼の學生である。

然し僕は只冷かなる一瞥をくれしのみ天上天下譬ふるにものなき、その美しき母の情を思ふ身に青春の夢が何であらう、失戀が何であらう。

東西名婦傳

ネッケル夫人

龜山郭公

夫人は、スキッルの或傳導師の娘なりしが、一千七百七十五年、ネッケル氏と結婚せらる。

夫人は、此時より夫を助けて、人の害となるべき者は、改良し、世の利益を起さんことに注意し、病院の改良につきては、一方ならず盡力をなしたり、當時パリの病院にては、患者の取扱ひ方、宜しからず、夫人は、専心之が改良に盡力し、又金を寄附して之が入用に充てければ、夫人の徳を頌せんが爲め、ネッケル病院の名、今尚ほ存せり。

夫人が、ネッケル氏に於ける、内助は一と方ならず、内外の事について、夫を助けたること、多かりけれど、其の夫を愛するの心、又甚だ強きが故に、世間の人をして、斯る内助のありと云ふ、ことを知らしめず、唯だ夫の名を揚げんとのみ勤められたるが如し、されば誰あつて、ネッケル氏に、斯る助けのありぞとは、知る人なかりし、されど氏は其れを德として、又明らさまに、之れを人に告げ、其細君の美風を吹聽しければ、初めて夫人の名、世に知らるゝこととなりぬ。

夫人は、元より文學を好み、著述を以て、餘暇の業とせんことを望まれたりしが、良人の不同意により、快よく、之れを斷念し居られたり、併れども、天然の好む所ろ、自ら其道を求めて、發出したれば其著少なからず、中にも、病院建築記錄、離婚論、假葬論等は名高きものなり、而して其鬱積したる文學趣味は、其愛娘の上に現はれたるものか、其第一女は、後に、マダム、ヅ、ステールと稱し、歐洲を席捲したる大豪傑ナポレオン第一世を、恐怖せしめたる、女文豪は、即ち夫人に由て生れ、夫人に由て教育せられたるなり、左れば夫人は、妻として、能く夫を補佐し、母として、能く其子を教へ、良人愛兒をして、天下に名を擧げしめたれども、夫人の名の反つて、後面に、ひそみ居ること、之れ尤も夫人に敬服すべき、美徳にこそ。

謹告

毎度申上ぐることに候が投稿諸姉の御寫眞何卒至急に御送り被下度候

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

後顧の憂無からしむる方法

某會社員談話

昔し佛國皇帝第三世ナポレオンが全盛時代に於て保險に這入つた處が、世人は皆疑ふて威名赫々たる皇帝が保險に這入るとは何事であるかと云ふて居たが、盛者必滅の道理に漏れず、憐れ皇帝も國民の同情を失ひ死亡の時は甚だ不運の境遇であつた、其時に皇后は大なる保險金を得て同情のない國民の内に在つて、富裕なる生活を送る事が出來たと云ふ話しがあるが、今日の國民は只眼前の事計りに汲々として居て百年後の計を爲すものは少い、生命保險などは文明の利器であつてこれを善く利用せぬのは文明國民でないと云ふてもよい、米國當りでは慈善事業に投資する人は、多く保險を利用して居る、某夫人の如きは一人の力で善く大學の設立費を造つたと云ふ事があるが、是れ皆保險の利用に過ぎぬ、假令ば今日千圓寄附するものが、若し其千圓を保險金に拂ひ死亡後遺產として其保險金を寄附する事とすれば、殆んど十倍の資金を寄附する事が出來るのである、現在に滿足せず末を樂むの考さへあれば斯樣な人も出そうなものであるが今日の日本では未だ左樣永久の考へを持つて居る人は少いやうである、私共の如き僅かな給料を貰つて生活して居て、一身の活動が一家全體の生命を繫ぐ綱であるから、此綱の絕たれたなれば一家は路傍に餓死せなくてはならぬ、斯樣な事にして置くと云ふ事は一家を維持して往くに甚だ不懇切なやり方であると思ひます、故に私は最も困難なる時代より保險金だけは家族の爲に支拂ふ租稅と心得て拂つて居ります、又私は薄給の爲に子供の爲に學資を積立て、置くと云ふ事が如何にも出來ません、併し生んだ斗りが親の義務ではなく、相當に其子を教育する丈けは親の義務に屬する事と考へます、そこで教育資金の保險に這入りました、私の子供は三人ありまして十四歲になつて皆二百圓づつ貰ふ約束で保險に入りました、一ヶ月三人分で三圓程出せば此金を貰ふ事が出來、若し途中で止めるとか死亡するとか云ふ時は積立金丈けは貰ふ契約になつて居りますから、知らず〳〵の間に貯金すると同じ事で、毎月掛金取立人が取りに來ますから、いや應なしに積立が出來る事になります。

次に私は家屋を持つて居りません、而し家庭を營んで居りますから相當の家產を持つて居ります、東京の火事の多い處に住んで居るので一朝火災に遇ふたならば翌日からは裸で暮さねばならぬ身分となります、それも甚だ不用意千萬の事でありますから、私共は物品火災保險に這入つて火災に遇ふたら千圓貰ふ事にして居ります、千圓に對する費用は僅に年額二圓で濟みます、年額二圓の金を出す事は容易でありますが、千圓一時災害の時に貰ふ事は容易でありません、私は毎日會社に出て執務して居りますが、他の會社員は火事と聞くと非常に狼狽致しますが、私は平然として執務して居ります、何故なれば燒けたら千圓貰ふのですから燒けても善いと思ふて居るからであります。

家庭に於ける言葉遣ひ

統計監査官　吳文聰

論語に久しうして能く之を敬すと云ふ敎へがあるが、夫婦間が親密である丈け互に敬意を多く表せなければならぬのが當然である、然るに今の新家庭の有樣を見るに其言語の如きも亂暴を究めて居る、夫が其妻を呼ぶにても敬稱を用ゐて「お高さん何々を持つて來て頂戴」と云へば人が立聞しても甚だ美しい家庭であると云ふ事が知れるが、「高‼何々を持つて來い」これが通常の言葉で、恰も車夫馬丁を呼び捨に使ふが如きと同一樣の言葉使ひである、斯樣に妻を呼んでこそ始めて威嚴があるかの如く思ふて居る人が多い、又今日の學校出の細君も此呼捨に遇うて中々之に相當する敬意を表したる言葉を用ゐて居らぬ、夫婦關係は平等である、夫を天とし妻を地としなど云ふ觀念は昔しの女大學であつて、今日は夫婦相等しきのが本分であるなどと言ふが如き考への下に、夫に對しては恰も友人と談話するが如く「ヨクッテヨ」とか「自分の手許にあるものは自分で御取り」とか云ふ風にやッつける、互に威嚴を張うとして相讓らず、後ちには喧嘩口論となり、遂には夫れが平常の事の樣になり、其弊が延いて子供僕婢にまで及ぶと云ふ實に亂暴を極めて居る家庭が多い、斯る家庭は多く別居制度を採つて新婚早々別居した家庭に多いやうである、私は元來別居主義に贊成して居たのであるが、實際の模樣を見ると反つて別居制は感服しない樣であつて、今日では甚だ其可否に迷ふて居るのである。

別居制の利害

林學士　松波秀實

私は新家庭を營むに當つて別居したがよいか、又は同居したが善いかと云ふ事は其人並に其家の狀況に依つて區別せねばならぬ問題であつて、別居が善いとか同居が善いとか判然と何れの家庭に向つても斷定を下す事は出來ないと思ひます、今日の社會の有樣では同居制を勸告す可きが七部で、別居制を勸告してもよい家庭が三部であると思ひます、假令ひ別居制を採用するとしても、三四年は老父母の下に置て充分に仕入れた上で、別居さすのが順序であつて、新婚さすや否や別居さすと云ふ事は甚だ不得策であると思ひます、今日別居制の弊害は幾つもありますが、第一に父母の膝下に在つて母の參謀長たる事もなくして何等の意思の自由も與へられず、恰も器械の如く道具の如く命之れ只從ふて仕事をして居つたり、女學校の寄宿舍に居つた娘などが、俄に一世帶の全權を委ねられて、それで一家を發達さして往かうと云ふ事は到底不能の業であると云はねばなりませぬ、殊に夫婦丈けの間柄なれば左程困難でもありませんが、婢僕を使用したり又近隣との交際の如き事は到底是れ等の婦人には出來ないのであります。殊に新夫婦丈けで新世帶を持つたもの、一缺點は家庭に威嚴が無い、秩序が無い、禮儀が無い、假令ば夫の友人などが來ても高尙な談話を爲さず、野卑な話しについ流れ易く、友人の爲めに新婦は愚弄さるゝに至る事がある、カルタ會場の當り番に善く斯る家が充てられるが如きは、畢竟家庭に遠慮が無いからで、一方から云へば家庭に威嚴が無いからである、若し茲に老夫婦が控へて嚴然として居つたならば、談話の種も異なり、遊びに來る友人の種類さへ異なるに至るであらう、其他費用の使用方の如きも緊要な處には使用せず、表面を飾る事柄の方に多く用ゐる事になり、監督者なくして新家庭を充分に營んで往く事は甚だ困難の事であります、併し別居制の利益を云へば、新舊思想の衝突を避ける事が其一得であるのと、舊家庭と新家庭と相對照して往き進歩を計らうと云ふ念がある等が其利益なる點と思ひます。

官吏生活の裏面

某省　某高等官の談話

自分は某省で課長の位置を勤めて居つて月給百六十圓程貰ふて居る者であるが、凡そ今日の社會で官吏生活程困難の者は無いと思ふ、吾々位の位置の官吏で借金の無いものは殆んど無いと云ふてよい程である、自分は決して貯蓄はされぬが同輩の人の如く借金をして居らぬ丈けが大に誇る處であると思ふ、其代り借金をせぬが爲めには非常に家庭を質素にして居る、子供が五人程居るが、下女は一人外には使用して居らぬ、家も山の手の方で實に粗末の處に住んで居る、官省への往復は電車にぶら下つて出ると云ふ位にして居る、それで月の終りに至ると如何にせば金を借りずして此月を經過し得るやと云ふ事が非常に憂慮を要する事柄となつて來るのである、何故に官吏生活が斯く困難であるかと云ふに、日本では官吏と云ふ職務が一の名譽の職務となつて居る、故に相當に外見を張らなくてはならぬ、商業家の番頭などは垂前掛でも業務に從事する事が出來るが、高等官何等と云ふ肩書があれば平常でもフロックコート位着て居らなくてはならぬ、場合に依つては大禮服まで作つて置かねばならぬ、又商人では其職務上の交際費は別途支辨の途もあるが、官吏では左樣に往かない、地方から出て來た官吏を饗應するとか又部下の人の爲め惠むとか云ふ事は皆一定の給料の内より支出せねばならぬ、宴會にて割前は一番多く出さねばならず客にすれば役が勤まらんと云ふ次第であつて、表面から見れば甚だ美しい派手な役柄であつて人から羨まれるやうな身分であつても、內實を白狀すれば斯樣な有樣で、借金せずして一ヶ月を送ると云ふ事が大なる手柄であつて、金を貯へるとか子孫の爲に敎育費を積立て置くとか云ふ餘裕は吾々位の位置では到底出來ぬのである。

而し其職務は非常に廣い權限を持つて居て、數百人の長官となり其進退の權を握り、又百數十萬圓の國費を適當に支辨すべき責任さへ持つて居る、樂しみは只々其處である、生活上の困難は到底免かれぬものと覺悟して居る次第である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

◉評議員會　一月廿三日（第四水曜日）午後二時より評議員會を本部樓上に開く

◉有功章贈與　韓國の特使一行中の李鉉卿氏に一等有功章、同朴洲烈氏に二等有功章及韓國支部評議員澁谷子氏に三等有功章を贈與せり又韓國本部創立及擴張上非常に盡力ありたる功績により左の諸氏へ二等有功章を贈與せり

韓國本部副長子爵夫人兒玉澤子、副長加藤眞佐子、同評議員馬山委員部長三增友子、評議員京城委員部長三浦喜代子、評議員山口かめ子、評議員木島駒子、評議員峰尾柳子、評議員京口貞子、評議員中井ひな子、評議員國分琴子

◉新年互禮會　豫報の如く去る九日午後二時より九段坂上偕行社樓上に於て本部新年互禮會を開催せり當日は總裁閑院宮妃殿下始め名譽會員山階宮妃殿下久邇宮妃殿下にも特に御台臨あらせられ理事近衛前公爵夫人毛利前公爵夫人鍋島侯爵夫人岡部子爵夫人を始め評議員幹事併て百六十餘名外に顧問清浦男爵岡部子爵小笠原子爵出席せられ一同席定まるや會長代理近衛前公爵夫人一同に代り總裁殿下に年詞の辭を奉ると同時に一同敬禮を表し之にて式終へ宴會に移り質素なる折詰の辨當を開き餘興には眞龍貞水の本溪湖の梅澤旅團と閑院宮殿下御統率なる騎兵聯隊の勇戰狀況及び出世の盃の二席を演じ松林伯鶴は熊本籠城の婦人一席の講談あり散會は午後三時半なりし尚在韓國堀內相談役及在鎌倉有島評議員より特に祝電を送られたり

◉韓國皇室への慶賀狀　今回韓國皇室に御慶事あるについては本會は（本會韓國本部と聯合の上）左の書面に美事なる衛立一面を添へ獻納する事となれり

恭しく惟るに陽春和煦の時に方り久子等の深く敬愛し奉る韓國皇太子殿下御慶事の式を擧行せらる實に日韓兩國の爲め慶賀の情に堪へざるなり

我愛國婦人會韓國本部は博愛仁慈なる韓國貴婦人方の協贊援助の下に益々其慈善事業を擴張せしめんとす此時に際し妃殿下御冊立の事あるは本會の深く欽仰する所なりとす

別紙目錄の品御慶事の紀念として獻呈す幸に菲薄を咎めずして久子等の誠意を採納し給はゞ本會の光榮何ものか之に加へん　久子我總裁殿下の臺旨を奉じ本會員日韓同胞姉妹六十萬を代表し謹みて茲に慶賀の辭を奉る願はくば閣下の御傳啓あらむことを

右獻納品は目下歸朝中なる兒玉統監府書記官（韓國本部相談役）の手を經て獻呈の手續せしものにして衛立の表面は金泥繡地水に菊の刺繡裏は絹地秋草の圖（上田萬秋筆）高さ四尺三寸幅三尺二寸枠は黑呂色塗織物中へ付腰板菊模樣入市松にて京都飯田呉服店製にて頗る精巧なる美術品なり（本紙第一面參照）

◉「愛國婦人」擴張方通牒　本月十四日付愛乙第二號を以て「愛國婦人」の義につき左の通り通牒せり

拜啓愈々御多祥奉賀候陳者本會機關新聞の儀は去明治卅五年創刊以來漸々發達し來り本會事業に直接間接の貢獻する所不尠特に本會記事即ち會告欄の如きは少くも幹事一般に公示必讀の運に致し度希望に有之候處本會今日の場合多額の費用支出致兼候に付差當り本年より各幹事部に限り每號一部宛送附候事に致し可申に付此段御承知相成度候尙本紙の儀は本會記事會告欄以外に於ても社會敎育、家庭敎育又文學趣味等多方面に多數の普通讀者を滿足せしむる丈の效力を有せるものに御座候事は疾に御熟知相成居候通りの事實にも有之尙本紙は進んで週刊に致度ものと存候間此際貴下並に各幹事部長に於ては幹事は素より一般會員に本紙購讀方勸誘の御盡力相成度是月下會員大募集の時期に當り本會事業發展上に至大の影響を及ぼすものと確信候に付御坐候本件實行の儀は貴下より各幹事部長へ御移牒の上可然御斡旋被成下度切望の至りに御座候早々敬具

愛國婦人會長公爵夫人　岩倉久子

各支部長宛

◉寄附金披露　其の後金拾圓以上の寄附者左の如し

一金百圓　東京　伯爵夫人　阿部篤子
一金八拾圓餘　在獨乙クイデンホーウ、カレルギー伯爵夫人　ミツ子
一金五拾圓　東京　公爵母堂近衛貞子
一金五拾圓　同　薄井貞子
一金五拾圓　同　後藤常市
一金四拾圓　同　男爵夫人長谷川辰子
一金參拾五圓　同　片岡多摩子

右の內クーデンホーウ、カレルギー伯爵夫人は卅七年以來每年本會に寄贈せられ今回は其第四回目なり又後藤常市氏の分は故本會幹事後藤貞子氏の遺志に依り寄贈せられたるものなり

一金百圓　熊本縣　田代治子

右は卅七八年戰役中奥村五百子と同伴戰地へ慰問使として出張せられ親しく出征軍人の狀況を觀て益々軍人遺族並に廢兵救護の女子の責任たるを信じ爾來貯蓄をなして此度右金額を寄附せられたるものなり

◉評議員渡米　評議員津田梅子氏は一月八日午前九時三十分新橋發米國へ向け渡航せられたり

◉評議員死去　本部評議員伯爵母堂藤堂量子氏は一月五日逝去せられたり

◉送迎及會葬記事　一月七日野津評議員令息鎭雄氏の葬儀會葬は本會を代表し長岡芳子氏尾崎八重子氏勤められ一月八日津田評議員の見送りとしては鳩山春子山脇房子中山幸子高木鐐子の諸氏勤められ一月九日藤堂評議員葬儀の節は戸田子爵夫人佐藤猶子氏之を勸められたり

◉故近衛公三年祭　故近衛公三年祭を本月二日天王寺墓前に執行せらる右に付き本會を代表して評議員南鄉柳子佐藤猶子臨場左の奉告文を墓前に呈せられたり

故近衛公奉告文

維れ明治四十年一月二日故近衛篤麿公の三年祭を天王寺墓前に執行せらる久子此時を以て謹みて我愛國婦人會の發達を申告し併て公が其創業の偉績を感謝せんとす公や嘗に國家の重責に任せらるゝにも係らず愛國婦人會の如き亦實に公が熱誠なる庇護に賴り克く本會の始めをなし遂に之が組織成立の功を奏するに至りしは久子等の深く肝銘して忘るゝ能はさる所なり只惜しむ公や本會基礎漸く成り會運稍々發展せんとするの時機に際し溘然として長逝せられたることを豈に痛恨斷腸に堪へんや

日露の戰局開くるに當りてや久子等本會の存立に鑑み公か遺算に違はさらんことを努めたり幸にして我、總裁殿下の懇篤なる指導と會員諸氏の勵精とに依り會務日々隆興救護事業亦漸く見るべきあらんとす公薨去の時會員僅に四万二千餘人にして會に其發端も期し難きの觀ありしに今や方に會員六十万に登んとするの盛況を呈するに至れり

夫戰雲はこゝに散じて靄々たる和氣將に東洋を掩はんとするの今日にして此申告を捧ぐ嗚呼公在天の靈や誠に滿足を感ぜらるべきなり幸にして久子等の微誠を歆受せさせ給ふあらは何の幸か之に若かん虔んで白す

愛國婦人會長公爵夫人　岩倉久子

當日本會會計監督佐藤正氏も參拜せられたり

◉本會廣告燈專務囑托　本會の廣告燈設立の事は漸次步を進めつゝあるが今般本會顧問澁澤榮一氏の推薦に依り神戸要一氏に廣告燈事業專務を囑托せられたり

愛國婦人會會員並女子人口比較表（明治三十九年十二月末日現在）

支部名	特別會員	通常會員	計	三十六年末女子人口	女子人口百人ニ付會員比例	贊助員
石川	一、九九八	一九、五九一	二一、五八九	三八五、四七八	五、六〇	七九九
山口	八四八	二六、一四八	二六、九九六	五〇六、九二〇	五、三三	六
山形	九〇五	一八、二四六	一九、一五一	四三九、六一八	四、三六	四八
岡山	一、〇三一	一九、六八二	二〇、七一三	五七七、二七二	三、五九	八
愛知	一、三二八	二九、五一六	三〇、八四四	八六八、五三八	三、五五	六七八
北海道及函館	三、一四七	一四、四五八	一七、六〇五	五〇七、六三八	三、四七	五七
福岡	二、五四一	二四、〇五六	二六、五九七	七七二、七四三	三、四四	九五七
熊本	二、八六〇	一六、九六五	一九、八二五	六一〇、四四一	三、二五	二、三〇二
秋田	八五二	一二、〇八〇	一二、九三二	四〇三、九四六	三、二〇	四八
京都	二、一八四	一三、九三六	一六、一二〇	五二一、三九五	三、〇九	三七一
富山	八五七	一〇、八〇九	一一、六六六	三八四、九八二	三、〇三	―
香川	八二九	九、七一二	一〇、五四一	三四七、八九〇	三、〇三	三五二
兵庫	二、〇五六	二四、六五九	二六、七一五	八九三、七三四	二、九九	六八
群馬	一、五〇四	一一、九七四	一三、四七八	四五四、一七一	二、九七	二二三
愛媛	四一二	一三、九八四	一四、三九六	五一一、三九六	二、八二	三一五
長崎	三、二七六	一〇、二一〇	一三、四八六	四八九、三五〇	二、七五	五二
青森	一、一二二	七、三五八	八、四八〇	三二二、二一一	二、六三	七
宮城	一、四四六	一〇、一六〇	一一、六〇六	四五五、〇四七	二、六一	七
島根	三一六	八、八四八	九、一六四	三六二、六三五	二、五三	七〇三
佐賀	八五四	七、二二〇	八、〇七四	三二七、六七八	二、四六	四〇二
大分	八〇二	九、五二二	一〇、三五四	四三〇、〇二五	二、四一	四四五
神奈川	四八七	一〇、四一五	一〇、九〇二	四九九、六二三	二、三八	一
奈良	二八八	六、〇五五	六、三四三	二七八、一九一	二、二八	三三三
三重	四〇一	一一、二三八	一一、六三九	五二二、〇四三	二、二三	三四六
宮崎	二五八	五、二二八	五、四八六	二四七、二五二	二、二二	四四七
福井	七八〇	五、九六六	六、七四六	三二〇、一五四	二、一一	一
高知	二五五	六、四二〇	六、六七五	三一八、二四五	二、一〇	六一一
岩手	六六七	六、九二四	七、五九一	三六九、二七八	二、〇六	―
德島	三四三	六、五七四	六、九一七	三五二、六〇八	一、九六	八六
滋賀	四九一	六、五四八	七、〇四七	三六四、六八八	一、九三	―
福島	一、一九一	九、八二八	一一、〇一九	五八二、一五六	一、八九	五四五
大阪	三、五六七	一二、二七九	一五、八四六	八六三、四〇五	一、八四	一六
東京	七、五七三	一二、八八二	二〇、四五五	一、一五七、五一四	一、七七	三五
靜岡	六三五	一〇、四〇八	一一、〇四三	六四〇、八四八	一、七二	一
千葉	一、〇〇五	九、六九八	一〇、六九九	六五六、七八二	一、六三	二七
廣島	一、三八七	一〇、一六九	一一、五五六	七四六、六五五	一、五五	―
茨城	五三七	七、八五〇	八、三八七	六〇〇、四一三	一、四〇	一
山梨	三二五	三、一二四	三、四四九	二七二、一四八	一、二七	一三九
鹿兒島	一、〇六一	五、七六七	六、八二八	五九四、九八五	一、一五	八
埼玉	三五六	六、六五七	七、〇一三	六二七、五五六	一、一三	二七
和歌山	二六三	三、三〇〇	三、五六三	三五〇、〇六九	一、〇二	一
新潟	九一六	七、八三二	八、七四八	八九〇、〇二一	〇、九七	一七
岐阜	七一五	四、一一四	四、八二九	五〇二、六五八	〇、九六	四二四
鳥取	一六一	一、八九〇	二、〇五一	二一七、五四一	〇、九四	三七一
長野	五二四	四、四六四	四、九八八	八七四、五一五	〇、五四	一
沖縄	三二五	一、三三〇	一、六五五	二三九、六二七	〇、六九	九二
栃木	二八四	一、八一九	二、一〇三	四五〇、一二六	〇、四七	一六三
臺灣	一、一九四	四、九二四	六、一一九	一、四〇二、七七一	〇、四六	八、八三四
海外	七三七	二、一二六	二、八六三			二、六七六
計	五八、八九九	五〇四、九八五	五六三、八八四	二五、三一三、〇四〇	二、二三	二二、九九九

備考
支部ノ配列ハ會員比例數ノ最モ多キモノヨリ順次配列ス
北海道及函館ノ兩支部會員數ハ合算シテ掲載セリ而シテ函館支部ハ特別會員四百八十六名通常會員千五百八十二名ニシテ他ハ北海道支部會員數ナリ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

子供くらぶ

鶯坂

原田讓二

春霞が立つて櫻の花が綻び出すと、何處から集つて來るか、世界の鶯は一羽も殘らず寄り集つたやうに、其山は鶯の聲音でさわがしい程になるのです。其お山に小さな坂がありますが、其處を越さなければ、次の町へ行くことが出來ません、景色は佳いし、鶯の歌は終日聞かれるし、春になるとお花見かた〲出かける人も澤山あります。こんな風でしたから誰云ふとなく、此坂をば「うぐひす坂」〱と呼びだしました。

鶯坂に就いて、別に極々面白いお話があるのです。其は此坂を越えやうとして來かゝる人が、一歩、坂の麓を上りそめると、何だか心が陽氣になつて、全然鶯の魂にでも魅られたやうに、心の底の底から、穩やかな優しい歌がうたひたくて堪りません。平常はいかに澁い顏を爲た人でも、惡い心の恐しい人でも、または悲しくて〱ならぬ人でも、一度、此坂へ來ると、最う何もかも忘れたやうに、心はのたり〱と春の海ほども靜になつて、皆善い人になつて仕舞ひます。

一體、何した理由で此麼のだらうとは誰もかも口々に云つて不思議がる所なのですが、或白髯の生えた此村では仙人だと云はれる爺さんは、次のやうな事を申しました。

或日のことぢやつた、私がな、お山を越さうと思つて、彼の坂下まで來かゝると、櫻の花は雲のやうに白いぢやろ、其上よ、其上にな、それは〱神々しい奇麗な顏の春の神樣が居らつしやる、其神樣はの、うす紅さした衣を着て、にこやかに笑ひながら、鶯の歌の調子を取つて居られる、それが霞の中から夢のやうに、うすぼんやりと見えたのぢやが、乾度彼の女の神樣が、往來の人に歌を唱はすのぢやろ。」

此言葉を聞いてからと云ふもの、みんな此は全く神樣の業だとしてしまひました、神樣でなくて誰が人間の心を善くし、人間の心の悲哀を去ることが出來ませう。

恰度、春のことでした、芳男さんとお隣の美ちやんは自分達も可愛い聲で春の歌をうたひながら、此山へやつて來て、通りかゝる人々の模樣を見やうとしたのです。山の樹の間の岩に腰を下して、二人は今か〱と來る人を待つて居ました、花の香は折柄の日の光に蒸すやうで、鶯はやはり清い聲をあげて鳴いて居ます。

ふと二人が見附けたのは、彼方から歩んで來る巡査さんでした。巡査さんは左の手で劍のつかを握つて、難しい顏をして「エヘン〱」と咳拂ひをしながらやつて來ましたが、最う坂下へ來ると笑ひだしました。いかめしい口髯の下から、早や妙な歌聲が聲えだしましたから、芳男さんも美ちやんも笑はずには居れません しかし巡査さんは何も知らないで居ました。

次に來たのは村のお坊主です、黃色な法衣をかけて、高下駄を穿き、能く馴れたもので、何の苦もなく坂路を上る。悲しいお經を唱へることしか知らないお坊主が、聲を張りあげて、幼い時の樂しい歌を、玉を轉ばすやうにうたひ始めました、これには芳男さんも美ちやんも驚いてしまつたのです。

二人は嬉しくて堪りません、今度は誰が來るだらうと木の間から首をのばして見詰めて居ますと、汚い着物を着た乞食の兒が、田圃のほとりで摘んだのでせう、菫の花やたんぽゝの花をいぢりながら上つて來ます。乞食の兒はお腹の空いたのも忘れて、ピヨコ〱踊りつゝ歌ひ始めました。

父ちやんも母ちやんも春の野へ出た
蓆も脫いで草の褥へころりとねりや
父ちやんの髯に春の風
母ちやんの夢に花が咲く

日頃は軒下へ立つて、悲しい聲で物をねだる乞食の兒が、全で夢を見るやうな笑顏でこんな歌を唱ふものですから、二人は心から鶯坂は善い坂だと感心いたしました。

それから、まだ〱色々な人が喜び歌ふ樣を見ましたが、最う日暮となりましたので、「さあ美ちやん、歸つてね、母さんに今日のお話を爲ませうね。」と芳男さんは美ちやんの手を取つて立ちました。

二人はまたも美しい聲に歌ひながら坂を下りますと、後では鶯が夕日のなかで猶もうたひ續けて、さくらの花は降るやうに散つて居るのです。（をはり）

小猿の恩がへし

文學士 原 篠川

ダーウヰンと云ふ英吉利の偉大い先生が、或時動物園の番人を御覽になりますと、其の頭に甚い怪俄を致してをります、先生は吃驚なされまして、何うしたのかと御聞きになりますと、番人が申しますには、「私が檻の中に跪座んで居りますと、一疋の狒々が狂ひ出しまして、不意こんな傷を負はせました、其の折居合せました一疋の小猿は、平生から私に能く馴れて居りましたが、私がそんな目にあひましたの見まして、恐い狒々の事は忘れて仕舞ひ、大聲を出したり嚙み付いたりして、遂々此の狒々を放して呉れましたので、漸の事で命だけは助かりまして御座います、ヘイ、小猿にどうも救ッて貰はうとは存じませんで御座いました」と、斯う申したさうです。

なんと坊樣孃樣、餌を呉れる番人に傷をつけた、圖太い狒々は大馬鹿では御座いませんか、それに引きかへて恩人を救つてやッた、小猿は體が小さくッても怜悧なものです、山椒は小粒でもひりゝと辛い、皆さんも小さくッて居らッしやるが、乾度御怜悧でしやう、此の小猿は亞米利加産だッたと申します。

第四十七作歌募集
題　鶯
選者　大口鯛二氏
規定　一人一首綸葉書に認める事
優等の作歌は二月廿日發行本紙上にて披露すべし

第卅八回短文募集
題　隨意
選者　編輯局同人
規定　百八十字限カナ附用紙葉書
優等の作は二月廿日發行の本紙上にて披露すべし

第廿五回俳句募集
題　春の山
選者　編輯局同人
規定　一人一句綸葉書に認める事
優等の句は二月廿日發行の本紙上にて披露すべし

第十八回新談募集
題　隨意
選者　編輯局同人
規定　成るべく短きもの用紙葉書
優等の作は二月廿日發行の本紙上にて披露すべし

締切二月五日限り

▲臺灣子守唄

臺灣 王士將

嬰仔睏一夜大一寸、
嬰仔惜一夜大一尺
譯　坊やはよい兒だ、寢んねして、早く生ひ立ち、一夜の內に寸も延べ
坊やはよい兒だ、寢ねして、早やく生い立ち、一夜の內に尺も延べ

▲長崎の子守唄

長崎 眞崎きみ子

ねんねんよー。ねんねんよー。向ふ小山に鳴く鹿は。寒さに鳴くか、つま呼ぶか。寒さに鳴かぬ、つま呼ばぬ。明日は小山の狩りと聞く。つれた小供が十二匹。葉山葉山に隱し置き、助け給へよ、山の神、此の子が成長するなれば、つれて詣けい致します。

▲津輕の子守唄

青森 茂品その子

寢ん寢子、寢ん寢子、坊づか惠子は猫公て、猫公に緋遣りや、ごろにやんごろにやん、惡ら鼠奴が天井で忠々、猫公の聲聞て、隅方に逃んネー、鼠奴づるいや狡いとて生置ものか、惡戲め、惡らい猫よ強い猫公、坊づア家來等皆つよい、家來引き連れ團子を捧げて、是から乘り出す鬼の島、どん〱太鼓のどん拍子ブーブー喇叭吹いて、押寄せろ、寢ん子こセー寢ん寢コセー。

賀狀を賜はりたる諸姉へ一々御返禮可申の處多數につき乍略儀以本紙御禮申上候かしこ
愛國婦人發行所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

春の旅

松原至文

○七日の朝、お正月の西京を辭す。長閑なる都かな、松の內なればか戸閉したる店あまた、街々は舞子すがたしたる娘子や、壺や、大き丸髷の嫁衆、さては髯男など、赤き紫の振袖空に舞はしつゝをかしき聲たてゝ羽子板つけり。七條出づれば窓の外は青菜畑はるかに、ところどころ小流あり、寒田あり、人立ち、林立ち、村落あり、愛宕は青水晶の如き寒空に暗紫を佩べるすがた嚴かに見ゆ。痩せつくせる大和の山々すぎて、神風の伊勢路に入る。

田島愛子

○わがせこは何處行くらむ沖つもの名張の山は、何處なるべきか、常に通へる途なれど知らず。あのあたりこそ鈴鹿が關の址なるべき、人の行くことまれらなる古茫の古道、風うすら寒し。筆すて山は車窓よりは見えず、杉木立鳩なく山の神路朝熊はすがた雄々しく、常世の波よする三重の海路も、去年の初日影こゝなる波路におろがみしを憶ひて、ことさらにゆかし。神風とやらむは此の山、此の水よりや立ちぬべきと額づきて過ぐ。

○貝は富田の里、蛤は桑名の里、木曾伊斐の流の、夕榮にかゞやくをながめて、蒼茫たる尾張の平原をすぐれば金城にて日は暮れぬ。蒲郡の海、晝なればすぐれたるながめなれど、星月夜、たゞ海波の畦の、時々星かげをくだきては的礫ときらめくを見るのみ。遠く村火の依微たるは舞坂の里か、右は遠州灘の轟きなるべく、左手は濱名の水一面、海道の松並木かや、暗にさんざめく聲のさびしきかな。

○夜のあけたるは國府津なり、箱根八里の洞の路、いかに過ぎたりけん知らず。大磯の松林、なほ夜の裳裾を纏ひて、墨繪の如く黑きに、天は紅を潤して茜珊瑚に燃ゆ、すはや林すぎて海來る、海は金泥を拖きたり、金樺に染まりたる帆の、ゆる〳〵と波上をすべり行くを見る。曉風爽かに吹きて、天には細長き雲、夢の如くに曳き、車中の客、皆惡夢より醒め來りたる如くおの〳〵活き〳〵したる眼して窓の戸を啓けぬ。

○父危篤の飛電を手にしてこゝを發するの感の、恐怖、戰慄、惡寒、いかに胸の苦かりけむ、又春に入りて新橋に來れり。迎ひにとて來れる友、親しきもの、文の上の友などの風采、容貌のさえ〴〵しさよ。內に還れは門にしめ繩、床に飾り海老、かゞみ餅、わが膝を容るゝ一小書牀も、また主人が舊年の塵をとゞめず。こゝろよく朋友、家族のものと屠蘇に醉ふて眠る。寒天に夢の暖かさよ。

短文

▲嬉しいお正月（一等）　京都　花輪よしの

「叔母さんまだ明日もお正月ですか「はあそうです「嬉しいな又此おべゞきせて頂戴よ「はあだからおとなしくおやすみなさい」いはれて常よりもかしこく寢衣きかへてふしどに入りしは七つになりし美ちやん「坊も五つになつたから一人ねんねするとて夜具かけやればやがて二人とも安き夢路に入りぬげにうらやましきはおさな子の上よ

羽ねてまりつきて遊ひし樂しさを
こらは今宵の夢に見るらむ

▲選者曰　選者にも子か欲しい

▲お友達（二等）　岡山　武田須磨子

今も門で紙鳶よ毬よと賑わしい聲がして居る私には仲好の可想いお友達が幾人もあるのです私は暇があると飯事の仲間入もします罪や僞に汚れた事のない唇から花の匂ひの樣に飜れて出る話は丁度神話でも聞く樣な氣が致します神の御心に叶ふた幼子達から淸ひ〳〵慰藉を享けて居る事を私は感謝せねばなりません。

▲選者曰　宗敎家の樂觀可羨

▲賀正（三等）　靑森　茂呂その子

鳳暦歲を改め、靑帝駕を環らせ、玆に禧しき、明治四十年の新春を迎ふ、心を淸め、身を淨め、旭光きら〳〵と迸る、萬里の蒼天を仰ぎ、遙に、茜さす玉の皇居を伏し拜みて、聖恩洽き照代を畏み、恭しく寶壽の萬々歲を祝ぎ奉る。

▲選者曰　すら〳〵と書かれたり

▲眞心　甲府　中島ふて子

霜月十四日入營する某子を送らむとて十三日の下り三番にて龍王驛に着た。今年五ッになる兄君の總領有樂吉なる可愛男の子を連れて行く事に爲た。切符を購ひプラットホームを出づれば有樂チヤンは助役にすがり伯父サン〳〵と呼で……ボーは家に居ろ時はこれだけと片手を擴げ汽車にのる時はこれだけと一本折て四本を出して見せた嗚呼人の兒は皆斯く天眞爛漫たるものを!!!

▲雪の日　浦和　水野淑子

雪はふりぬ田も畑も山も林もいつか姿を沒してしたゞ一面の銀世界風は寒いが誠に美くしい今朝の景色にいて友を迎へに道はさばやと姊の名よばんとしてふと思ひ出しは「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」

▲元日の朝　山形　阿部さゐ子

百千鳥のなく聲も長閑に、さし上る年の初日はうらゝかに、亡き父君か、賜はりし御眞影を、かゝげ奉れる床に輝きぬ、我、千代の玉椿をさゝげ、み前にぬかつきて、君が八千代をことほぎまつれば、たがひきそめのつま琴の音か、「枝も榮ゆる若みどり、生たつ松に巣をくふ鶴の、久しき御代を祝ひまふ。」としらべもゆかしく、庭の松風にかよひて、きこゆるもげにめでたしや。

▲同胞　大阪　富永才子

「御免あそばせ」と誰やら訪なふ人あるに立いて、見れば、こは〳〵、瞬時も忘るゝ能はざる、我同窓の友、否同胞とちぎる某の君にてありき「オ、貴姊は「おなつかしいッ」とばかり、思へば一別以來玆に八年、水魚の交りは日に添て深けれど、道隔つれば相見ん折もなかりしに、思ひがけなきけふの對面、夢ならずやとさへ思はれつゝ、君も我も、涙、涙

▲新年の雪　東京　中隈富士子

霜さへいたくは置きしとなき此地鎌倉も今朝は暖かきふすま重れてもなほ身にしむ寒さ哉と起き出て見ればさゝやかなる築山の松の葉のかくれぬほどにうす雪の積りてわが下なる四季咲きの紅ばらの恰もたなやめが薄化粧に紅さしたらんさまに見ゆるもいはれず。

▲佐保姬　靑森　吉田やす子

玉の臺のともし火も今宵はわけて美しく御館は梅、桃、櫻、菫、薔薇さては菜の花土筆に至るまで千萬の春の盛り咲けき花環もて飾られつゝ、詩神愛姬の玉の御座べ天の羽袖もひら〳〵と、和して銀盤の玉ところげ微妙の調一曲、一曲嚠喨として浮橋の塵も爲めに動かの樣、門邊には馬よ車よと鶯が初旅の聲、下界はまだ眠の靄に包まれて。

▲梅花來鶯　大阪　十合貴美子

きのふ友より贈り來せし椿一輪床のなかめに挿しかへつけふはまれにとひくる人もなければしばしのま文見むものと文机に向ひなでしこあるは色々の歌集文集とりいでゝ歌の材料もがなと繙き學びなき身はなか〳〵に詠みうへくもあらず折しも春風の吹くがまに〳〵庭木の梅の綻び初めしにや酒ならぬかほりもれてさへゆかしきに鶯の來鳴くさまたなく嬉し嘸我に丹青の心あらばすぐ書寫し得て友に贈るの樂しみあらんに。

▲田舍の春　群馬　伏島たき子

初日影、門の松竹、日の御旗を始め、新年とし思へば、もの皆のどけきならひなれど、一しほ靜けき此の山里、今日ばかりは、さすがに機織る音もせで、家々には、稻にあひたる米俵つみ重ね、手織木綿の衣に「メリンス」の帶しめて、いかにも嬉しげに又踏がに、毬つき遊ぶ少女子の餘念なき、思へば都にしられぬ趣であらう。

▲天命　靑森　留目文子

姊さん新年御目出度う私は又一つ無事にオルドミスを重ねましたよ御安心下さい老父母は始終私のために御心配下さいますけれど私は此で滿足して居ります ほんとに農業は面白う御ざいます罪なき農民を相手に今は御正月でも稻扱の當番をして居ます姊さん私は一生農業に從事しますよ謂所天命ですからネ忠實に働かうと思ふてゐますさよなら。

▲申上げ候

一、短文幷に新體詩の御投稿は成るべく字體を階書にして、總傍訓を御施し被下度く候

一、御投稿には必ず御住所を御明記被下度候、然らざれば、若し御當選相成り候とも、募集繪ハガキ御贈呈見合せ申すべく候

一、締切期日の儀は、何卒堅く御守り被下度く候

草々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

御題　新年松

一昨十八日午前十時宮中に於て歌御會始を行はせられたり御製竝に詠進中の御前披講に係る歌左の如し

御製

あたらしきとしのほきこときくにはに
　よろつよいはふのきのまつかせ

皇后宮御歌

としたちてまつもよろこふこゑすなり
　やしまのほかもなみたゝぬよを

東宮御歌

たみはみなとしのはしめをまつのえた
　かとにかさりてみよいはふらん

東宮妃御歌

かとまつのみとりもきよきあしたかな
　ちりやはらへるとしのはつかせ

軍事參議官海軍大將大勳位功三級　威仁親王

おいまつもこまつもともにさかえゆく
　いろこそみゆれとしのはしめに

勳一等　慰子

さくらたのみほりにたてるおいまつも
　いろあらたなりとしのはしめは

選歌

大侍從從七位勳六等　源朝臣仲敏上

ときはやまきことにむすふまつかさの
　かさなるとしをいはふけふかな

國幣中社寒川神社宮司正七位　額賀大直上

いくちよのとしのはしめをいはひきて
　まつはときはのものとなりけん

東京府士族　醫學博士　柴田承桂上

としくにたかくなりゆくまつのうへに
　ことしもあふくはつひかけかな

島根縣士族　仙田敬鐘上

まつかせのちよのこゑこそあらたまの
　としのよことのはしめなりけれ

山梨縣平民　名取忠愛妻　正代子上

たてまつるとしのよことのかす〳〵に
　ひかるゝまつやいかにうれしき

福岡縣平民　藤吉三近上

もひとりかくむわかみつにきみかよの
　ちよたのまつのかけうつるらん

鹿兒島縣平民　森山彦太郎妻　まん子上

あさひさすはるのみやまにとしたちて
　こまつのたけものひまさるらん

尙ほ詠進の和歌は總數二萬二千二百二十五首にして此内より選歌の光榮を得たる名取正代子森山まん子の二氏は共に大日本女學會の會員にして名取氏は同時に我が愛國婦人の投書家なり

又吾が愛國婦人發行所にて萬事の手續をなし詠進したる和歌は左の如し

○よる浪のしらゆふかけて濱松も年たつ今朝は御代祝ふらし　東京　月子

○山里はおのつからなる門松にしるしはかりのしめかさりして　山口　末田竹子

○年ほきの歌にそへまし老松の千代ゆたかなる影うつして　群馬　弁田しま子

○うこきなき御代のためしの門松に千代をしらふる年の初風　山梨　赤尾島子

○大君のめくみの露にうるほひて松も嬉しき年むかふらん　靜岡　廣叔清子

○新しく年をゝまれて若松のいやしけるらん春のみやまに　京都　花輪余志野

○のとかなる年の初風かよふらし千代の聲する庭の老松　愛知　木原貞子

○あら玉の年の初日を祝ふなり南の山の松風の聲　山梨　芦原とみ子

○のとかなる年立にけり門松もちとせの色を君にさゝけて　佐賀　横なつ子

○松立てゝいはゝぬ門もなかりけり治まれる世の年の始に　東京　川村季子

○ゆたかにも初日かゝやく老松のちとせのかけに年を祝はん　東京　龜井ゐと子

○家ことに祝ひて立つる門松にかすそふ御代になりにけるかな　宮崎　山下武眞子

○なきわたる鶴はとみれは松の上にちとせの初日さし渡るなり　京都　磯谷澤子

○君か代は千代よろつよとひゝくなり年たつ今朝の松風の聲　熊本　吉永とみ子

○新しき年をかさねて若松の色こそまされ九重の庭　埼玉　森田竹子

○新らしき年をむかへて更にまた根さしかためん大庭の松　長崎　本田りす子

○初日影松のみとりの色はえて年たつ今朝の長閑なるかな　東京　麻生畝子

○朝日さす千代田の宮の老松に梢しつかに年たちにけり　大阪　今井いと子

○君か代はえそ樺太の山松もふくや御國の年のはつ風　三重　大縄よし子

○おやの年指をりかそへ萬代を松に契りて年祝ふかな　東京　小林梅子

○やすらかに年立つけふは門松の梢ゆるかす風たにもなし　福岡　松村裕賀子

○常磐なる松に初日のかゝやきて御代のとかなる年立にけり　三重　小島駒子

○鶴のすむ千代田の宮の松の葉のつきせぬ御代の年たちにけり　東京　執行菊子

○松といふ松の梢に新しきみとりさしそふ年はきにけり　岡山　武田須磨子

○新しき年をむかへておもふかな雪に色ます松のみさをを　山梨　河内きよ子

○あら玉の年の初日のみひかりを松の葉こしに仰く嬉しさ　愛知　水俣六女子

○日の御旗かゝけつられて家毎にさかゆく御代を祝ふ門松　京都　今井とよ子

○千代ならぬ色こそなけれ年の立つ雲井の庭にしける若松　岡山　山本種子

○島山の松の千歳を濱の上にゑかき出てたる初日影かな　山口　末田貞節子

○さかえゆく御手植松のみとりにも　福岡　田代みき子

年の光のみえわたるかな

○新しき年の始をいはふらし賤か門にも松風のふく　岡山　山村直子

○新しき年たつ今朝は庭の松にさへつる鳥の聲ものとけき　東京　楢瀨靜猪

○ときはなる松の根さしのゆるきなく榮えん御代の年たちにけり　函館　佐多益子

○立かへる年の初日の影高きみそのゝ松にたつかれのする　京都　花輪三保野

○天さかる鄙の伏家も年たちていやしからさる松かさりかな　新潟　町田きくえ

○去年の暮わか手に植し園の松若芽生ひけり年の始に　東京　弁谷田丈子

○あら玉の年たつ今朝の大庭の二葉の松も深みとりなる　三重　莊司種子

○あらたまのとしたちぬれはみそのふの松の翠もさかえますらん　仝　莊司惣子

○みそのふにいよゝ榮ゆる千歳松はつ日をうけて色まさりけり　仝　南部種子

○新しき年にまたあふ老の身の松もうれしき相生の友　千葉　鶴田久子

○あらためて吹きわたるらく松風の聲のとかなにもたてる年かな　山梨　分部梅乃

○常磐なる松のみとりに内外の霜をかさねて年立ちにけり　福岡　榎本喜寥子

○大内山松のみとりも色深くめくみあまねき年立ちにけり　京都　清水今子

○日の御旗かゝけぬ里もなかりけり年立つけふの門松の上に　長崎　林田鹿子

○老松も年くることに色そへて千代のみさをを世にしめすらん　兵庫　河本くめ子

○ゆたかなる年の始の今日といへは松も一入色まして見ゆ　山口　良永朝子

○あら玉の年の初日の長閑さにいよ〳〵高き嶽の松かな　愛知　下郷きみ子

○松風の音もしつかに年明けて君か代うたふ聲ものとけし　茨城　福田喜代子

○あら玉の年の始めの門松にひなのすまひも御代祝ふなり　千葉　清宮佐久子

○常磐なる松にたとへてあら玉の年のほきこといひかはすらん　兵庫　下岡松枝

○年立ちて松を入千代と壽くか玉の宮居の雛雀まて　東京　田村かれ子

○年のたつ松の梢に千代かけて舞ふ聲すなり君か友鶴　仝　田村夏子

○大君の御代榮えゆく年立ちていよゝ色ます松そめてたき　長崎　三隅靜子

○松にふく風につけてもあら玉の年ほく聲そ四方にきこゆる　仝　藤瀨喜代

○千代やちよかはらぬ松の深みとり門に立てゝも年祝ふなり　山梨　中島たれ子

○千代いはふ常磐の山の松陰にけさ立つ年の色そ見えける　東京　山内準子

○大入島かたき岩根の松か枝にかゝる初日の影の長閑さ　岡山　貝原夢惠子

○　東京　藤田紫子

○新しき年ゝるたひにいやまさる常磐の松の色そめてたき

○松風の音も靜に年たちて四方の海原たつ波もなし　千葉　兵頭蘭子

○朝な夕なめてぬるおのか姫小松年立つけさは色も一しほ　福島　小川しん子

○常磐なる松のみとりはあら玉の年立つことに色まさるなり　山梨　林友惠子

○年のたつ大内山の松か枝にけふのとかにもひな鶴のなく　岡山　廣畑章子

○新年をことほきたつる門松は千代にかはらぬしるしなるらん　山形　芳賀ます子

○姫松にわれもちとせをちきりてん立ちかへるよの年の始めに　北海道　五十嵐やす子

○年縄の注連縄はりて祝ひてんあきの方なる庭の老松　青森　茂呂その子

○あら玉の年をむかへて國民のちよ萬代を祝ふ門松　靜岡　井上りう子

○あらたまの年ほく今朝の門松に千歳の色のまつみゆるかな　青森　田島正子

○初日さす千代田の宮の若松は年と共にやいや榮ゆらん　仝　棚田滿智子

○治まれる御代の姿は嬉しくも年たつ門の松にみえけり　山梨　三枝はま子

○あしたつの聲もきこえて磯山の松ものとけし年の始めは　神奈川　鈴木まつ子

○あら玉の年の初日を羽にうけて千代田の松に鶴舞ひ遊ふ　青森　中津なほ子

○豐なる年をむかへて大御代を萬代まてと祝ふ門松　仝　佐藤園子

○おく山の岩根の松も世に出て都の初日けさあふくらん　岩手　山崎米子

○あら玉の年を迎へて君か代の八千代は松の色にみえけり　京都　山本敬子

○千代よはふ御垣の松も年またて常磐なからも色まさるなり　東京　阿部秀子

○年立ちて朝日さしそふ松か枝に今年はきかん鶴の聲　長野　植原千代子

○初日さす御園の松に巣籠りて千歳をよはふ鶴のもろ聲　愛知　山内經子

○門ことに松を立てゝも祈りてん君のみさかえ千代に八千代に　廣島　太田國子

○門ことにしめゆふ松の深みとり君か八千代の色とこそみれ　東京　井上深雪子

○あら玉の年たつ庭の老松のかはらぬ色をこゝろともかな　京都　楠春枝

○千代を經て若むす岩の松の上に皇御國の初日照りそふ　東京　大澤幸子

○大御代の惠をうけて五百枝さす松ものとけき年迎ふらん　長崎　葛原梅香

○生ひ繁る御園の松のとことはにみとりかはらぬ年立ちにけり　熊本　黒川入代子

○美しくみそなはすらん初日影長閑に照らす御園生の松　京都　渡邊よれ子

○千歳ふる松の梢もこゝろあらは年の初日やうれしかるらん　仝　渡邊時子

○一入の緑をそへてあら玉の年をことほく峯の老松　仝　難波眞久子

○あら玉の年をかさねて幾千代も色かへさらん松のみとりは　廣島　竹入男子

○初日影にほふあしたの姫小松さかえゆく代の色そめてたき　岡山　寺松政子

○豐なる御代をほきてや鶴のなく年たちかへる松の梢に　長崎　下川入重野

○大君の惠あまねき年たちて嚴寒の島松色まさりけり　北海道　足利つゆ子

○高麗人もめくみかしこみ日の本の年むかふらん松かさりして　京都　池田美登子

○あら玉の年ほきことやうたふらん舞子の濱の松風の音　仝　藤理登子

○老松のみとりの色もいやまして初日さしそふ九重の庭　東京　桂むめ子

○初日さす大内山のかけ高く稜威こもれる松の色かな　三重　中島千萬子

○新しき年のよろこひ松か枝の葉こと〳〵にみゆる今朝かな　群馬　木暮千代子

○千歳ふる松のみとりも色そへて若かへるらん年の始めに　靜岡　星見ゆう子

○あら玉の年たつことにしめはへて宮居の松は千代を經にけん　山梨　小尾玉代子

○山影の根松ひきそへさゝくみて年立つけふを祝ふ杣人　東京　中與富士子

○あら玉の年をことほく門松はいくよかさねしみとりなるらん　靜岡　萩原さた子

○あら玉の年と共にそさかえゆく松の緑の色まさりける　長野　隱岐きん子

○かきりなき御代をことほく年にあひて園生の松も緑そふらん　埼玉　水野淑子

○けふもまたその年ひとつかさねけり老木の松の初日むかへて　東京　木内きぬ子

○家々に門松たてゝ祝ふなり靜けき御代の年の始めを　山口　國佐春子

○君かます都大路の家ことに初日の影をうつす門松　東京　金子幸子

○しつかなる年をむかへて松か枝に朝日まはゆくさし渡るなり　岐阜　志津たま子

○大御代の千代田の宮の松風も實に靜なる年たちにけり　青森　四澤泉子

○年立ちていやさかゆるは信濃なる御料の松の林なりけり　長野　廣長清子

○千歳ふる松の齡も君か代も久しかるべき年たちにけり　岡澤仲子

○新しき年の初日の影そひて榮けたかき御園生の松　函館　龍岡とし子

○軍よりかへれる兄か手植せし松にしめはへ年をむかへん　仝　飯塚むつ子

○新玉の年をむかへて相生の松に千代呼ふひな鶴の聲　長崎　江口武子

○あら玉の年の光もほのめきてちとせかはらぬ松そ嬉しき　東京　日吉里子

（以下次號）

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

天　手すさひに小かめにさしゝ梅の花年の初にひとつひらさぬ　東京 長塩錠子

▲評 なりにあへる花のこころもゆかしう

地　からうしていけたる床の生花をあはれことゝのみたしつるかな　東京 龜井爲登子

▲評 種子ある家にはげにかゝることすくなからず

人　うれしくも咲出にけりいまたしとおもひなからもいけし梅か枝　兵庫 中村益子

▲評 わがものといひこなされたるに修練の功かくれなし

甲

花實か今朝もて來つる寒菊をそのふの梅にそへていけはや　大阪 富永才子

年ほきゝ友をまたましはやさきの梅の一枝いけ花にして　群馬 伏嶋たき子

花瓶にさしてそめてむうるはしき友のおくりし梅の一枝　山口 米田竹子

その人の心の様も見ゆるまて枝ふりゆかし床の活花　岩手 山崎よれ子

花賞のかこにみちたる梅か枝はいつれの家に香に句ふらん　三重 小嶋歎子

まらうとの待ちまうけにと花活けし主のこゝの美しきかな　東京 中山きわ子

一花は友におくりて一枝は小かめにさしてせこをまちてむ　大阪 十合貫美子

一枝の花をかさりて何となく趣そへる室の内かな　三重 小嶋駒子

すゑものゝ小かめの鶴にふさはしと千代の松か枝折りてさしけり　新潟 青木美家子

瓶に向ひ手にとる花の何よりも枝ふりよきかうれしかりけり　名古屋 梅村入代子

乙

きりすてし梅の小枝もあつむれはつくゑを飾る花とこそなれ　埼玉 水野淑子

なつかしき友の庵を訪ひくれは床にゆかしき梅の押花　京都 清水いま子

少女子かさせる手振も忍はれて香りゆかしき瓶の梅か枝　京都 難波冬久子

鶯の初音またきに窓の内のを瓶の梅は今さかりなり　京都 山本收子

花瓶に今一いろの數としてこれも添へなん野うはらの花　山口 岡佐春子

一枝をたをりてさしゝ梅なれと句ひみちたる埋火のもと　仙臺 阿部鈴子

このまゝに見るはあやなし文机の花瓶にいけて我か友とせん　埼玉 小宮とめ子

今朝見れは小瓶にさせる梅の花三つ四つ二つさきいてにけり　山形 阿部さゐ子

心こめておのかいけにし梅よりもよろこふ母を見るそうれしき　岡山 谷とめ子

簡のうちを野とも山とも思ふらむさしゝ草木の花のこゝろは　京都 池田與登子

霧ふかみ外園の花は見えねどもかをる手いけの瓶の梅か枝　三重 大嶽よし子

路はたに咲きし野梅も時を得て九重深き床に香れり　東京 上野芳子

枕邊に梅もさしたり病みませる母なくさむるためになりやと　新潟 町田きくえ

手すさみにいさやさゝまし田舎よりけさもらひつる梅の一えた　三重 諸戸常子

鶯はまたべの月を出ぬ間に開くや床に活けし梅か枝　東京 清水町子

夜半なからかをりにしるく白梅の瓶に一ひらゑむそうれしき　大阪 佐野眞子

くる春にさきたち句ふ梅の花一枝なりて床に挿さはや　鹿兒島 藤野錠子

掛瓶のしら梅一枝かけつゝにためぬふりさへなつかしきかな　岡山 武田須磨子

日をふれとちるまては見んかめのまゝ友がさしたる梅の一枝　長野 植原千代子

なつかしき友の訪ひし居間の梅おくゆかしくも句ひ初めけり　岡山 清水梅子

床の間にいろか氣高く薫るなりあるじゆかしき水仙の花　岡山 山崎露子

活あけて見る目嬉しき手すさひの花はこの世の友にそありける　東京 麻生歎子

送り來し友の心をさしそへて小床にめてん早咲の梅　山口 木田貞節子

雪なから折りて押しつる梅か枝のおのつからなる姿やさしき　愛知 渡邊とよ子

長閑さに小瓶の梅も綻ひて霜の居間ににほひぬる哉　三重 荘司みや子

手折られてさゝれたりとも白梅の小かめに高くさきにほふ哉　福井 渡邊良子

徒然に手折りていけし梅の花今朝鶯の枝やたつねん　函館 片岡初槃

日の本の床にかされるいけ花は外國人もめてはやすらん　青森 田嶋正子

なにはあれとふりよくいけし梅の花に友の心もにほひぬる哉　大阪 今井糸子

活置きし老木の梅も花咲きて枕へ近く句ひぬるかな　岡山 藤波音子

清き香は室にみちけり君か爲おほつかなくもいけし水仙　埼玉 森田竹子

丙

梅もあれとやすきにませと玉椿きみほく今日のとこにいけはや　名古屋 名取照子

若松に直くなる竹と梅か枝をさしてことほく新玉の年　京都 岡澤仲子

▲評 新玉の年、足引の山など七育旬に枕詞をたちいれたるは妙ならず

とみかうみふりなほすまにふれにけん我か袖までも梅か香そする　京都 渡邊樂子

霜雪を凌きて咲ける白梅をいけて操の花となかめん　長崎 萩原花閑

折にふれていけなはにほふ春秋やうさ玉もよその床のいけ花　靜岡 竹内幸子

活瓶の根しめの梅のほゝゑむや人待ちかほにみやしまの松　東京 渡邊仙子

えたことにあめつち人のことわりをたゝしく立てし花の道哉　長崎 葛原梅香

新年に千代へん松を學ひやのかめにさしつる今日そうれしき　愛知 水俣六女子

清めたる居間の床の押花や天地人の法則そ正しき　青森 茂呂その子

のとけさに軒はの梅も咲き初めぬ一枝手折りて瓶にさゝはや　京都 岩室駒子

たれこめて訪ふ人もなきつれ〳〵もさすかたのしき梅か枝の花　三重 大嶽さる子

七日たち十日たてとも姉上がさしつる梅の香り床しき　山形 芳賀萩子

さしましゝ人の心もいろ〳〵の花のにほひにあらはれにけり　愛知 市橋幾子

活おきし花も盛の梅か香に聲うち出る籠のうぐひす　岡山 貝原嶋葛子

山ふかき枯葉かくれの小松さへかめにさしてはいとゝゆかしき　埼玉 加藤美代子

濁なき池の玉水くみいれていけにし床の梅の一枝　北海道 足利つゆ子

こゝろなく鶯の音にさめしころ床にさしたる梅句ふ哉　福岡 蜂谷より子

▲評「こゝろなく」は多く無情の方に用ゐられたり「何心なく」といふ方には少し適せず

手すさひの琴の音よりも挿花のかをりゆかしき床の梅か枝　群馬 木暮千代子

むつましき家庭の床にいけし花天地人の行儀正しき　三重 尾花ふみ子

治まれるめてたき御代や三才の行儀正しき床のいけ花　三重 南部種子

いもうとがこめし心は白梅の芳き薫りに活てこそ見め　青森 吉田安子

學屋の作法の居間の生花は行儀くつさぬ姿なるらむ　三重 長井民子

手いけして床にかさらむ一しほのなかめゆかしき梅の折枝　兵庫 下岡松枝

小原女の柴の上に乗せ來たる早咲の梅床のもの哉　東京 下谷きよ子

諸人のあれやこれやと押花のなかめて後に名をそ知りける　廣島 太田園子

霜しくれふるをしられは玉たれのをかめの花そさかり久しき　岡山 山本種子

嫁き來て老を養ふまこころは挿枝の梅にかをりこそすれ　三重 荘司種子

學びやに迎ふひまには花いくる少女か友の愛らしき哉　青森 田嶋愛子

また遠き春もこゝには句はせて誰か活けにし花の三つ四つ　東京 中山正子

幾千代も緣かはらぬ松竹をいけて八千代の春や迎へん　甲府 中島ふて子

あまりにはためすさしたる花かめのはなのふぜいのやさしかりけり　横濱 鈴木まつ子

少子がつたなく押し梅なから花の色香は變らさりけり　靜岡 大高ふみ子

丁

東屋に二重釣瓶の水清く水仙いけしあるじゆかしき　東京 中根富士子

ぬくもをしこのまゝ置くはさらにうし心つくしの糸柳哉　岡山 横川よしの

我か思ふ儘にたわめて糸柳手活の花と眺めつるかな　東京 上野花子

下手ながら四季をり〳〵のはなとりてかめにさゝなむ心ゆかしき　京都 今井紀子

人氣のなせるぬくさにはかされて早くもさけるかかめの白梅　京都 花輪余志野

此奥に神のましますおもひしてけたかく見えつ床の活花　東京 田村かれ子

貴人も見下す床のいけ花は幸か不幸かたゝ一盛り　長崎 林田鹿子

わか家は庭のかきりもなかりせは四季のなかめを床の活花　東京 三宅ひさ子

さし花の道はいよ〳〵綠枝のほつえにかけてしけれとそ思ふ　北海道 河内りつ子

あしひきの山邊の櫻手折りきてやなきのいともそへんとぞ思ふ　東京 紅村たまき

四海浪靜けき床につけられてゆかしき梅のかをりなりけり　三重 南部積子

押花を採らんとすなるをさな子の帶に居かて押へてし獨　三重 西山ひさえ

吾が娘いけゝる床の白うめはこゝろ筑紫と句ひぬる哉　甲府 中島たれ子

幾千代もかはらね御代の姫小まついけて眺むるたのもしき哉　甲府 三枝はま子

野に生て同しくさ木の數にても君か御前もかさるさしはな　靜岡 萩原さた子

客にする穂もうれし我妹子よ活にし花の薫やらじと　東京 秋元小菊

文錦の富士の稲野にいけし花畾するがあたりまきき見えつゝ　三重 西山數子

▲評 結句解しがたし 投稿の文字は今少し明暸なるべし

應募歌數　五百三十二首

繪葉書贈呈

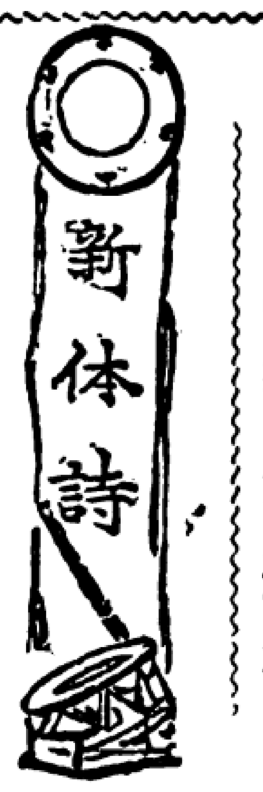
本誌が毎號募集せる和歌、俳句の繪葉書は、左の方法の下に選れる諸姉に贈呈す。

和歌
天位當選者に　二拾枚
地位當選者に　拾五枚
人位當選者に　拾枚

俳句
天位當選者に　拾五枚
地位當選者に　拾枚
人位當選者に　五枚

短文
一等當選者に　拾五枚
二等當選者に　拾枚
三等當選者に　五枚

新體詩
一等當選者に　拾五枚
二等當選者に　拾枚
三等當選者に　五枚



▲月姫（一等）　東京 都築せい子

裸形の童子み裾をとりて
黄金の冠さゝ揺がせつ
白馬の四つにみ車ひかせ
月姫今ぞ世に出ましぬ

宛然森は白氣をはいて
野精を吸とさ霧は匂ふや
芒の根末に消えざるごとく
讃歌に混じて秋風くるる

手にせし紫紋はらりとかけば
小虫の聲ぞ野末に繁き
月姫かた頰の微笑はしう
小つぼを振ば眞珠白露

▲新年松（二等）　青森 茂呂その子

眞紅に染し東の
黎明空の崇高しや
五彩の雲を靡まねく
御垣の松の枝の榮
自然の韵調神乃樂
丹頂舞ひて千代唱ふ
天津巌根の初日影
太古の儘に立つや春
皇國の德光美麗に
常磐翠色と照り渡る

▲谷の落葉（二等）　埼玉 森田竹子

さても幸なき我運命
思絶えせぬ浮世哉
我其昔若芽より
紅葉しにけむ昨日まで
憂てふ事も知らずして
みおやの森のはゝき木の
許に安けくありし身の
一夜嵐に誘はれて
脆くもちりぬア、我は
滿ちにし月のかくる如
いづれ散るべき身なればぞ
ちるなし我は厭はれど
落ち行く先は東路の
曠野をこそは望みつれ
夢に現にねがひつれ
さるを今はも山奥の
邊小暗き谷の中
かゝるべしとは思ひきや
あはれつれなき我運命
己言はんはをこなれど
羽振りも他に劣らじを
もみぢの色もうすからじ
されども今は谷の底
世をも人をも知らずして
このまゝ朽ちん悲しさよ
かくと知りせばいとせめて
誘はむ風は强くとも
はゝきの下にくちましを
繰りてかへらぬことながら
身をしろ雨の繁き哉

天　紅梅や春まだ寒き化粧室　東京 紅村たまき

地　靜かなる一村梅に香りけり　京都 堀ちくさ

人　閑路には梅が香りのしをり哉　東京 長井うた

十客

瀧よき梅の香高し九段坂　東京 鈴木寧子
初たより封して京の梅二輪　青森 茂呂その子
手折られて枝ぶりのつく野梅哉　東京 中山正子
謝へも香を配るや梅一枝　愛知 市橋幾子
我庵や梅を主しに客の來る　東京 秋元小菊
染糸をしぼる軒端や梅の花　山梨 三枝はま子
梅咲や父が書齋は手弁當　山梨 中島ふで子
分に過ぐ客も來にけり梅の宿　長崎 林田鹿子
玉と見る月もかゝりて臥龍梅　新潟 町田きくゑ
折て歸る枝ぶりの善き野梅哉　北海道 河内りつ子

○

梅か香につゝまれて居る庵哉　長崎 内藤緑子
梅咲くや未た手直しの濟ぬ土藏　北海道 加藤つい子
梅か香や茶の間にこもる爐の温み　京都 堀ちぐさ
琴の音に見上る塀や梅の花　群馬 木暮千代子
梅潜り〳〵社内の掃除哉　熊本 黑川友琴子
春駒の繋かれにけり野路の梅　東京 中根富士子
梅咲て南殿の小簾卷かれけり　名古屋 名取照子
一つ〳〵數へて嬉し梅の蕾　北海道 足利つゆ子
咲く頃は月も丸みて梅の花　東京 上野芳子
梅咲て待つ人多き小村哉　青森 田島愛子
雪白き學びの窓や花の兄　福井 坂井よし子
梅に月余所は朧の夜なりけり　熊本 黑川靜枝
梅咲や主は筑紫にわび住居　長野 臼田むつ子
梅林の奧や床しき歌の友　埼玉 水野淑子
梅の月知らで山家の宵寢哉　三重 根來くに
梅くゞり〳〵ぬけるや月明り　三重 南部種子
鶯の羽ふきに散るや梅の花　山口 米田竹子
高殿に琴のしらべや梅の花　岡山 山崎露子
切開く道も出來けり梅の里　三重 西山ひさゑ
何處までも廣がる梅の香り哉　岩代 中村ちよ子
友二人梅一輪の眺め哉　群馬 伏島たき子
梅か香や机の上の古今集　山梨 中島たれ子
追羽子のそれて散けり梅の花　岡山 西村長子
鶯も香にや迷はん梅の花　大阪 十合貫美子
開く月に吹入る梅の香り哉　濱松 萩原さだ子
鶯の聲に知られつ藪の梅　北海道 加藤波那子
柴の戸に梅の主のにほひ哉　長崎 小野みな子
梅は梅同じ句ひの山路哉　長崎 大塚八重子
老梅や東風吹く方に咲き初めぬ　福島 杉原たつの
紅梅の暈をなするや朱の硯　長野 臼田いち子
杖引いて舟見送るや梅日和　京都 乾つるへ
送迎は後に讓りて梅の花　京都 清水いま子
梅か香や風の落つく處まで　東京 村岡きく子
まきの戸の破れしも嬉し梅の花　京都 古川よれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「シンガーミシンは世界中一番高價なミシンですが、輕くて使ひ易くて、奇麗で、機械の構造が完全して居ることも亦世界第一です、價は五圓、十圓斗りの差ですから、全じく買ふのなら始めからシンガーミシンを御買ひなさい、經驗上御すゝめ致します」とはミシンに委しき夫人方の實驗談！斯くの如く洋服店、裁縫店、足袋商、シヤツ商、靴商に大好評を得たるシンガーは今や家庭の第一要具として全國の婦人に歡迎せられつゝあり而してシンガーミシン專門の裁縫女學校も漸次增加し、東京のシンガーミシン裁縫女學院も新築工事は昨年七月中既に落成しました……定價表目錄御申込次第進呈す

北米合衆國紐育市
シンガー裁縫機械會社
東京支店　東京銀座三丁目拾二番地
大阪支店　大阪心齋橋筋二丁目五十六番地
長崎支店　長崎大工町拾六番地
東京支店名古屋監督店　名古屋玉屋町九十六番地

ミシン裁縫專門教授
規則書進呈　郵券封入御申込あれ
東京麹町區有樂町一丁目五番地　シンガーミシン裁縫女學院
大阪東區北濱壹丁目六番地　シンガーミシン裁縫女學校

洋織物　裁縫物
毛布　敷物類
何なりとあり有まいと御思召品も御尋下さい

帝都唯一受賞袴
小町印學生袴
日本橋區彌生町　卸部　永井本店（電話浪花一八四一番）
神田區南神保町　小賣部　永井支店

第五博覽會三等賞受領
[illegible]
製造發賣元　東京日本橋區通油町十九（電話浪花一四六番）銅器物問屋　南部鐵瓶販賣　石川商店
代理店　京都柳馬場　春井喜助

優美高尚　スミレ　文明的經濟品
ナフキン羊紙
◉廿世紀の紳士貴婦人必携の懐中紙
壹百枚僅金六錢
發賣元　東京神田　久保田紙店
長電話本局三〇七九番
◉進物用ハ美麗箱入ニシテ芳香馥郁トシテ四季ノ御進物用ニ最適當ノ品

箱入定價表	
大	七拾五錢
中	五拾錢
小	參拾五錢

◉品質ハ吸收力ニ富ミ純白ニシテ衛生上缺ク可カラザル逸品

謹賀新年
弊店發賣專賣特許須藤式精米機ハ發賣以來僅カニ三ヶ月餘ニシテ清韓內地ニ於テ四百九十八基ノ賣約ヲナシタリ如何ニ本機ガ他精米機ニ勝レタルヤヲ知ラルナラン希クハ出京御實驗ヲ乞フ說明書御望ミノ方ハ御申越次第無代進呈ス
米國最新式無點火石油發動機
英國ナショナル式有點火石油發動機
其他諸機械確實廉價ニ貴需ニ可應候
京都市川原町三條南入二丁目　合資會社　粟辻商店
大阪市西區土佐堀通二丁目筑前橋詰　大阪支店

（ラクダ印）
（麝香石鹸）
ラクダ印麝香石鹸ハ高貴なる麝香に愛すべきスミレの香料を多量に含むが故壹度使用せバ其香氣身体ハ元より手拭タオル、ハンカチーフ及び浴後のゆかたに至る迄うつり香いたし五日間ハ腹部としてかほりを失なはざる効力ハ舶來品にも未だ見ざる一大特點を有す
◎〔定價大形廿錢 小形拾錢〕〔熱心勉強なる和洋小間物賣藥化粧品店にて必ず販賣せり〕
近來類似品有「ラクダ印」と非上に御注意
東京本石町三丁目十八番地　芳香劑種問屋　井上太兵衛

種々店內に陳列致し置き候間御一覽被下候樣奉希上候
御用の節は電話又は（ハガキ）にて申越被下候へば直ちに店員御伺ひ申上べく候
東京市神田區須田町六番地
中村時計店
電話本局一〇九〇番

貴婦人用最新形
新着ヒザ掛、羽根ぶとん
肩掛、ボアー、マフ、各種
佛國製リボン、造花、化粧品
特に內外流行界の精粹を集め其良品を最も廉價に販賣仕候

恭賀新年

春の花にも秋の月にも盃なうして何んの樂しみかあらん殊に戰後功を論し賞を行はるゝにあたり祝盃として用ゐらるゝには又ふさはしき意匠の盃なかるべからずまた賞品として御授與せらるゝ盃は弊堂のものに限るへし
宮內省御用達　東京市下谷池の端仲町　玉寶堂
電話下谷一特九六五番　一二四四番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

美術貴金屬袋物商
東京日本橋區人形町通り
澤田治助
長電話浪花二五六九番

御勅題模樣新年の松　發賣
半ゑりか神田赤のれん
本店　神田小川町通り（電話本局二八五三）
出店　新橋博品館階上　橫濱出張店橫濱館　赤坂田町五丁目支店

東京神田小川町壹番地
金銀寶石細工
西洋小間物化粧品
厚石舍美術店
電話本局六八一一番

新化粧
醫學士　佐々木多聞先生著
歐米の化粧術の本邦の化粧法に應用し日本人の皮膚に適應せる濃化粧。薄化粧かくし化粧等の模範化粧法
洋裝頒美本　全一册　價金四十錢

化粧の手引
家庭新報社編纂
高尚版入美本　全一册　定價金十五錢

文明の進むにつれて、貴紳淑女はともに必ず化粧の心得がなくてはなりません、我國從來の化粧法は、鉛毒のある恐ろしい白粉やら、總ての仕方が不完全です、とは云へ假例化粧法は進んで居ても、肌合の異ふ、西洋人の用ふる化粧品を、日本人が其儘に使へば、却て肌を見苦しくします、依て本書は、我國と歐米との長所をとり、日本人の肌に最も適當の化粧品の撰び方と、化粧の方法とを、委しく譯り易く說明したものです。

賣捌元　東京日本橋區橋町四丁目　丸善商店出版部
賣捌全國各地書店。小間物。化粧品店郵便切手にて代金御附送あれば直に郵送す

胃病良藥　太田胃散

德用　大俵炭　堅炭　土釜
右大俵炭は山出しのまゝにて壹俵の目方は拾貫目内外皆かます入に候實買は目方に掛け候故至極御經濟の燃料に候間是非一度御ためし願度御用の節は電話又は端書にて被仰附候へば遠近多少を問はず無賃配達仕候
東京市神田區三崎川岸　戶塚商店
電話本局三千貳百八番

最上醬油　キハク印
名譽大賞牌受領　於聖路易博覽會
醸造元　千葉縣野田町　茂木七郎右衛門
電信略號（キハク）又（ハク）

キハク印
醬油の味がよくて調理にかなつて居ると云ふことは皆さん一般の評判ですどーか其あぢのよくてそして經濟であると云ふことを御ためし願ます

東京支店　日本橋區小網町三丁目　中野長兵衛　電話浪花五七七番

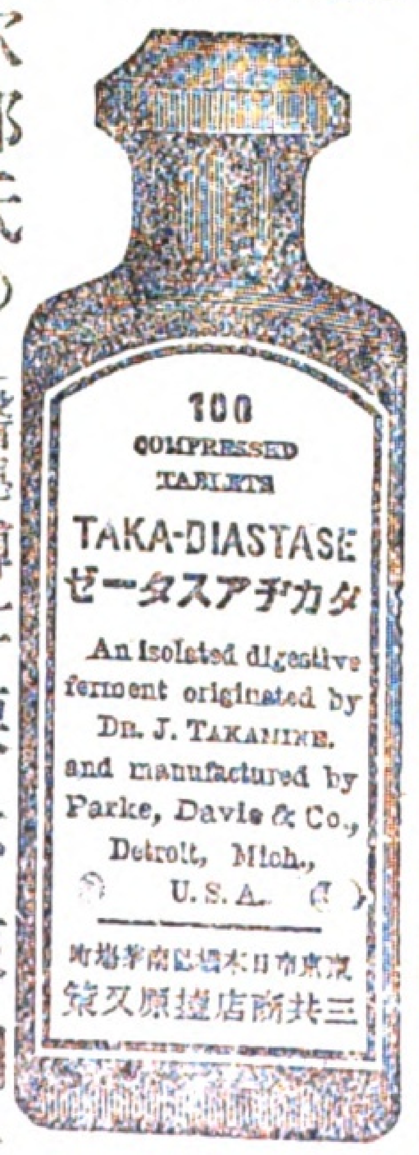
御半ゑり新もよういろ〳〵
ゑり善
日本橋區通町　ゑり善屋　電話浪花二一七〇番

壜詰最上清酒
大日本優等清酒　世界長
御年玉用は美麗箱入

世界長は內務省衛生試驗所に於て、試驗を經たる最良清酒なり
世界長は器械口瓶詰なれば體裁最も美麗にして用量を定めて飲用するの便宜あり
壜詰　一升入　四合入　貳合入　一合入の四種
發賣元　東京日本橋區堀江町四丁目（通稱てりふり町通り）　高橋商店
電話浪花一五六一番

消化新藥

醫學博士井上善次郎氏の實驗報告に曰く
胃腸障害は往々疾病誘發の根元となり、又疾病治癒の轉帰を遲鈍ならしむ、而して胃腸障害の內、澱粉を不消化に因するもの甚だ多し。殊に米飯を常食とする本邦人に於て然りとす。之を救濟する一に完全なる澱粉消化劑あるのみ、此目的に向て、余は高峯博士の發見に係るタカヂアスターゼを使用し、好果を收め、此種の製劑中最優等のものたることを確信す。



醫學博士栗本東明氏の實驗報告抄錄
高峯博士發見のタカヂアスターゼが唯一の澱粉消化藥として著大の効力を有するとは業に既に世の定評あり今や予は其實驗に基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著效を確認すると共に此種の患者に每に之れが服用を勸告する者なり
錠劑粉末各大小容器入各地藥舖にて販賣す模造品あり必ず高峯氏タカヂアスターゼと乞御指定。
實驗報告葉は無代進呈

新刊
新女訓
女子高等師範學校教授　文學士　下田次郎氏著
クロース製美本　全一册
定價八拾錢　郵稅拾錢

本書の世評
◎女學世界　文字の艱澀にして情思溢る、婦人日常の寶典として左右に備ふべきの良書なり
◎明治の家庭　日本婦人の本領を自覺する者は、必ず一讀せよ、文章流暢にして佳、近頃出色の好著なり

發行所　東京神田區錦町壹丁目　明治書院
長電話本局二四三八番

カメリヤ洗粉
カメリヤは時代の要求により生れたる最新最良の洗粉なり香氣爽快にして色を白くし皮膚を艶麗ならしむ

定價
大瓶廿五錢
瓶入十二錢
袋入五錢
小袋三錢

發賣元　小林富次郎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

座椅子

特許第九〇一〇號

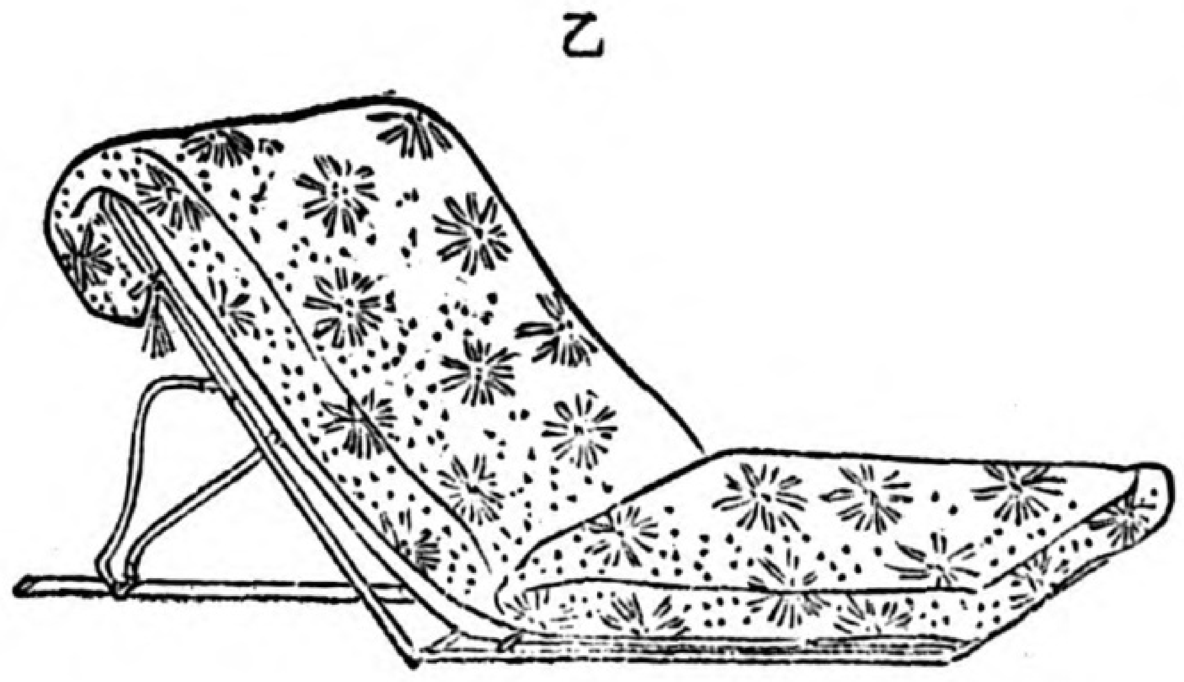
○此座椅子ハ日本風又ハ韓國風ノ室內ニ適シ構造ヨリ起ル自然ノ彈性ニヨリテ身體ヲ安全ニシ愉快ノ休息ヲ與フ故ニ老人、產婦、長時間讀書ヲ爲ス人滊車滊船ノ旅行ヲ爲ス人胸腹部脚部等ノ慰安ヲ要スル病人ニ適シ特ニ**喘息患者**ニ好適スル由ニテ同患者ヨリノ注文最多シ

○此座椅子ハ一箇ニシテ甲乙丙及ヒ丁ノ如ク變化ス即チ本圖甲ハ靜坐ニ適シ甲ノ手摺ヲ後部ニ廻シテ乙ノ如クスル片ハ讀書ニ適シ更ニ手摺ヲ後部ニ送リテ丙ノ如クスル片ハ安眠ニ適シ使用終リテ丁ノ如ク疊込メハ携帶ニ便ナリ

○材料ハ鐵骨ニ小豆色エナメルヲ塗リ之ニ强靭ナル布帛ヲ張リタルモノ蒲團ハ美麗ナル更紗等ヲ用キ新ラシキ打綿ヲ入レタルモノ又復頭部ノ觸ル、所カ蒲團ノ下ニ螺旋狀ノ枕ヲ裝置シアレハ柔カニ身體ニ觸レテ倚リ心地ヨロシク品質形狀高尙優美ニシテ室內ノ裝飾トモナルベシ

甲

乙



丙

丁

大西軍醫正よりの來狀

近來日本家屋用座椅子の類各種製造販賣するものあるも貴下發明の座椅子は他のものと撰を異にし特に重症患者用に適當なるを認む余は自から之を試用し又重症各種患者に應用せしに半臥位に於ける使用は最も好適にして從來患者を半臥位にするには三角蒲團を用ゐ或は積夜具を用ゐたるも工合甚宜しからずして貴下發明の座椅子により始めて安靜の半臥位を與ふるを得るに至れり此器の爲め今後多數患者に慰安を與へ治療を輔くると多大なりと信ず云々 於廣島

陸軍一等軍醫正 大西龜次郎

價格從來ハ尙試驗中ニアリシヲ以テ單ニ金五圓以上ト致セシガ最早確定ニ付左ノ通リ定メ候

一號 更紗蒲團付キ エナメル塗 金五圓五拾錢
二號 同更紗蒲團付キ 上等エナメル塗 金六圓五拾錢
三號 メリンス模樣蒲團 上等エナメル塗 金七圓五拾錢

東京市內配達無料
東京市外荷造賃配達料實費

發賣所 東京市芝區下高輪町廿一番地（電話新橋三〇六五番） **武田樂民堂**

東洋一 **製造大販賣** 御小賣

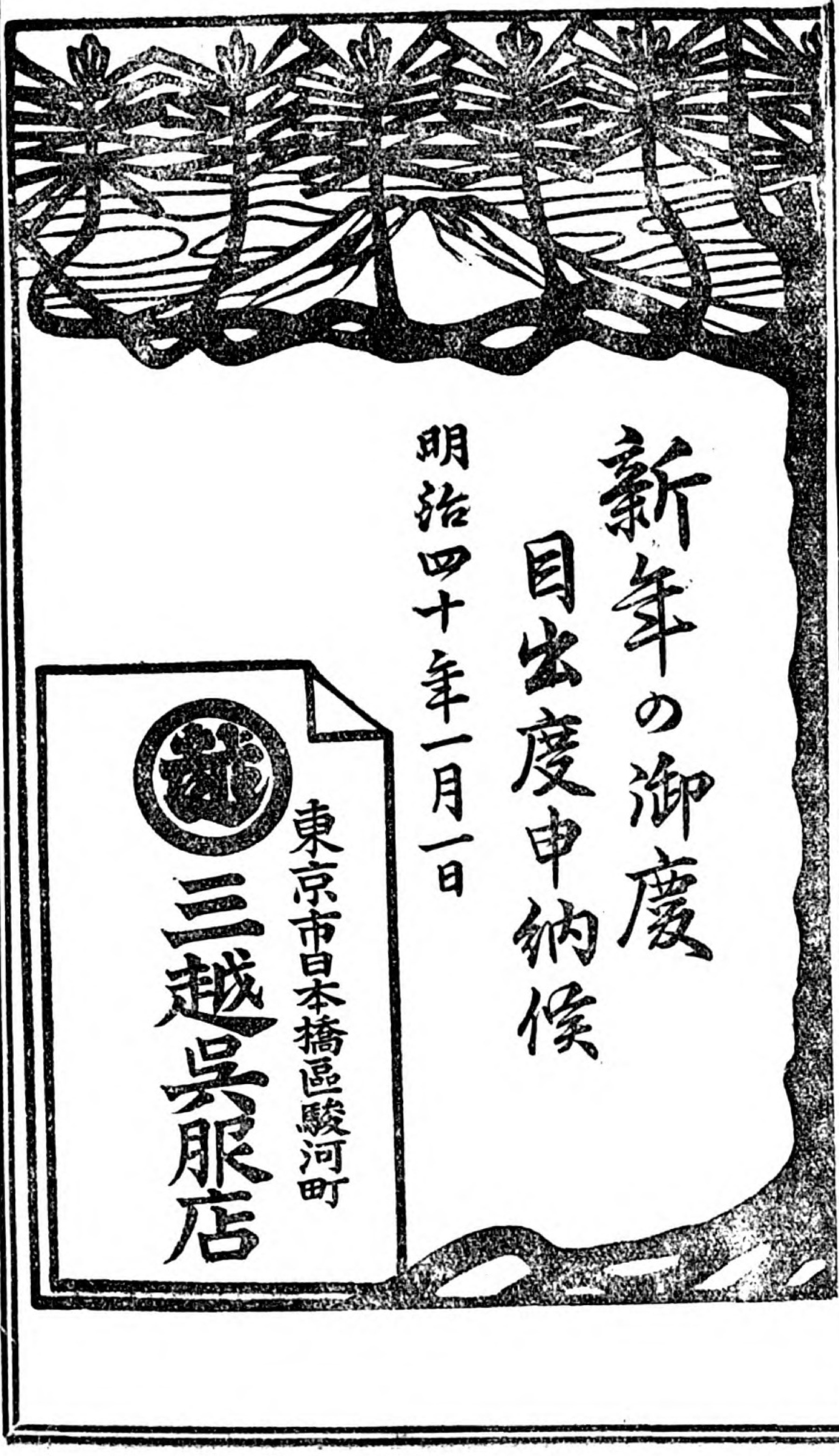
夜具・蒲團類 綿ざぶとん

諸官省御用

上等下等澤山あり御好次第山の如し
街鐵も外堀線も小川町東明館前下車を乞

東京神田區表神保町
矢田商店
電話本局長二〇二八
市內無賃配達

綿質保險附・確實大安賣・縱覽御隨意



大日本淑女學會

會員募集

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士世家
▲每號科外講譚を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲每號雜錄四十餘頁を附す
▲會員の質問は直に解答す
▲會員の歌文を誌上に揭ぐ
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ケ年完結とす

御自分のお宅に居つて高等學校の全課程を講習なさらうとする本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全な女學講義錄を發行して頒ちます講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便なる方法を計ります卒業は弐箇年會費も低廉て僅に都會一ヶ月の學費があれば優に全學期を終はることが出來ます

▲規則書は申込次第送ります

東京神田南甲賀町（電話本局二千四番）
大日本淑女學會

▲報知新聞評 高等女學校の全學科を知名の女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかる可く各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に『姫百合』と題する五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡て天下講義錄多しと雖も實益に趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

東京市麴町區錢瓶町（常盤橋內）
日本興業銀行
電話本局 三、三〇〇番 四一一番 三七番 （特）一〇二番

資本金壹千七百五拾萬圓

營業科目
一 擔保附社債に關する信託業務
一 有價證券其他貴重品等の保護預
一 有價證券の賣買元利金の支拂及び取立
一 地方債、社債、株式等の發行募集事務
一 各種の信託事務
一 國債證券、地方債證券、社債券、株券の擔保貸付及手形の割引
一 國債證券、地方債證券、社債券の募集又は引受
一 法律規定に依り設定したる財團を抵當とする貸付
一 定期預金、當座預金、特別當座預金

東京市日本橋區通一丁目
合名會社 森村銀行
電話（特）本局六七三番 電話本局四九八番
定期預金 六ヶ月以上 年五分五厘
當座預金 百圓に付日歩 八厘
特別當座預金 同日歩 壹錢壹厘

東京市日本橋區小舟町三丁目
株式會社 第三銀行
電話浪花四四二、浪花四五一番
預金利子
定期預金 六ヶ月以上 年五分
當座預金 百圓に付日歩 八厘
別口當座 同日歩 壹錢
全國送金 無手數料
其他銀行一般の業務便宜取扱可申候

天下一品
最上醬油
釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治
賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

スコット乳菓
咽喉諸症肺炎其他貧血病ニ著大ノ効驗アり早ク試賜ヘ
說明書ハ橫濱郵便局私書函第五十八号
スコット乳菓部ヘ御申込アレバ無代價ニテ進呈ス
代理店橫濱市山下町廿八番館
米國貿易商會

營業品概要
○各種時計類附屬品
○双眼鏡及アルズム鏡
測量用具諸械
製圖器及繪具
氣象觀測器械
貴金屬美術品
東京銀座四丁目
服部時計店
電話新橋長七一四、一一三〇

袴乃親玉

東京日本橋區長谷川町
卸部 美濃磯本店
電話浪花二八五九番
本郷區本郷五丁目
小賣部 美濃磯本郷支店
電話下谷一四一五番
淺草區諏訪町 美濃磯淺草支店
日本橋區佐內町 美濃磯佐內町支店
神田區小川町 美濃磯神田支店
深川高ばし際 美濃磯支店
芝區新櫻田町 小田商店
牛込區神樂町一丁目 伊澤商店
四谷區傳馬町一丁目 伊澤支店

唐琴三味線胡弓諸樂器
特製音曲糸一式
樂器用附屬品各種
時好流行 胴掛根尾
象牙琴柱撥駒各種
其他御好ニ應し調製仕候
東京市神田區かじ町
菊屋總本店
電話本局二四九番
分店本郷三丁目六番地

正札附陳列場
西洋小間物 帽子各種 婦人用小間物
東髮用具 內外化粧品 玩具文具
中久商店
東京神田小川町通り 裏神保町一番地

醫院案內

院長 醫學博士 榊順次郎（每日午前診察）
副院長 醫學士 久保德太郎（每日夕刻診察）
婦人科產科榊病院
東京麴町三番町卅三（電話番町三九五）

內科小兒科 特に呼吸器病
麴町はやぶさ町二十八番地
ドクトル 川瀨元九郎
電話番町八二二番

婦人病專門
院長 櫻井克己
芝明舟町十九虎門外宮樣前
電話新橋三三二四
櫻井醫院

小兒病診療
宅診午前 往診午後
淺草區福井町貳番地
醫學士 內田愼太郎
電話下谷七一八番

院長 醫學士 烏山南壽次郎
烏山內科院
午前診察 午後往診
京橋區鎗屋町十一番地
電話新橋千七百四十六番

神田區西今川町三番地（電話本局三〇一九）
內科病特に腦脊髓神經疾患
院長 ドクトル メヂチーネ 峰秀世
峰內科醫院

東京神田區美土代町三丁目十七番地
內科一般
午前宅診 午後往診
板垣亨
電話本局貳千九百七十番

小兒科
乳兒ノ疾患及ビ育兒法
小兒皮膚病
拙者儀久ク獨逸伯林大學ニ於テ斯學ヲ專攻シ歸朝後每日診療ニ從事ス
ドクトル メヂチーネ 長井岩雄
日本橋區數寄屋町一（電本百八十）

眼科專門
神田區連雀町十八番地（郵便局前）
ドクトル 宇良田唯子
▲每月第一日は藥價診料共無料

第廿六回 第三回
產科婦人科學講習
高等產婦科新學期
東京日本橋區濱町三丁目七番地
楠田病院

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

洗用 ワツセル

●此ワツセルは油じみ油あか如何なる汚れでも揉ずに必ず落る石鹸曹達の如く布を損傷せず染色を褪さず費用と手數を省く經濟上有利なる日用品であります

●用法は湯一升に二匁(小杯へ半分餘)の割合にて溶解し洗濯物を凡二時間浸し揉ずに置き後湯又は水にて洗へば自然に脱ますシヤツの如きは(拾貳匁)入一本にて貳百枚は必ず洗へます御婦人の髮は一匁五分を一升餘の湯に溶解してかもじを洗ふ用に揉ずに洗べし左れば玉子で洗た樣になります又食器臺所道具を拭き掃除にも有効です

定價 拾貳匁入 金拾五錢　六匁入 金八錢　袋入二錢

芳香御肌洗粉 ワツセル

●此肌洗粉ワツセルは當時歐米各國貴族社會に流行する芳香類を加味し製造せしものなれば朝夕御使用の方は香氣馥郁として肌持晴々す又おしろいしたを用ひずして御化粧が出來ると妙なり

定價 最上 金七拾五錢 金貳拾錢　普通 五拾錢 六錢　參拾錢 三錢　拾七錢

東京市京橋區三十間堀三丁目 電話新橋一七一三
英國製ワツセル日本一手販賣元
御肌洗ひこ芳香ワツセル製造元
三友商會

日本第一の大勸業場

東京新橋角 帝國博品館 デンワ新バシ一六五二 三六一

愛國婦人記者 手島益雄氏著

農村の幸福法

二百ページ　定價金三十錢　郵税金四錢

上編目次

第一章家庭 如何にして結婚す可き乎―如何なる妻を迎ふ可き乎―如何なる夫を持つ可き乎―何を携へて結婚す可き乎―如何に結婚式を擧ぐべき乎―夫婦の權限は如何に定む可き乎―如何に相續す可き乎―家族關係は如何に定む可き乎―家族主義と個人主義―一家團欒 ●第二章教育 子弟は如何に教育す可き乎―獨立心を養成す可し―新智識―旅行倶樂部―町村圖書館の設立―村史を編む可し―大學殖民 ●第三章宗教 寺院廢合と宗教統一―鐘の音 ●第四章自治 地方自治と警察權―村長郡長縣知事の位置―市長の位置―納税の義務 ●第五章産業 信用組合を起せ―生産組合を起せ―購買組合を起せ―農家の副業―園藝の趣味 ●第六章公共 消防組合―道路の整理 ●第七章慈善 妊婦預所―無料宿泊所―子供預所―子供分配―召使懇親會―自殺防止會―動物虐待防止會 ●第八章衛生 衛生思想―如何なる家屋に住む可き乎―村醫を置く可し ●第九章會合 處女會の組織方法―宴會の改良 ●第十章娯樂 村芝居を始む可し―町村に音樂家を養成す可し―角力を盛に行ふ可し―盆踊を盛に行ふ可し

下編目次

家庭暦を作れ 家庭暦―祖先祭―墓參日―誕生日―戰勝紀念日―企業紀念日―親族招待會―家族同伴旅行會―子供旅行會―下女慰勞日―決算日―虫干日 ●臺所の設備は如何にす可き乎 出入口―郵便局の窓口―流しの工風―棚の作り方―水の口と湯の口―床の下とたゝき―竈の改良―水甕の改良―立つて仕事をする事―朝遲く起る可し―時間の貧乏―虚榮心を作れ ●如何にせば貧乏になれる乎 飯配達會社―如何なる金か―貯金か―主人の小遣金―妻たるもの笑ふ勿れ―身分に相應せぬもの―物の置場を整へな―玄關の下駄―女の髮―郵便の受附數―入るを計る勿れ出るを制する勿れ―只一つ―僅―品物を懸けにて買ふ可し―汲む水は盡きず―反古籠に糸屑

發行所 東京本郷區東片町百十一番地 新公論社
取次所 東京麹町愛國婦人會内 愛國婦人發行所

新年の装

歐米各國御婦人用品卒先輸入
御婦人装飾品多數
西洋諸小間物一式

東京市京橋區銀座三丁目
伊勢與
三枝小賣店
話新橋三九二七番

夏目漱石氏著
小説 鶉籠
全壹冊獨逸式洋裝 實價壹圓卅錢 小包十五錢

本書目次 坊っちやん、草枕、二百十日

「鶉籠」は天下青年の趣味をして一層だに墮落せしむるの虞なき作品たるを信ず

島崎藤村氏著
緑葉集
全一冊

目次 水彩畫家、朝飯、老嬢、藁草履、津輕海峽、椰子の葉蔭、及び家畜●附録として山上の憶出を添ふ 裝釘淸新 實價六拾五錢 郵税八錢

高野斑山氏著
近松世話淨瑠璃評釋

目次 心中重井筒、淀鯉出世瀧德、夕霧阿波鳴門、著者は元祿時代の精通家也即ち職る此著あり以て初めて近松文學の秘奧を聞くを得べく未曾有の元祿文學辭典たる第一卷實價八拾五錢郵税八錢

天うつ浪

幸田露伴氏著 春村氏畫

近時文壇の一大偉觀なる天うつ浪の第三出づ如何に本編が其波瀾洶湧の壯絶を見すや

第一金七十五錢第二金八十錢第三金八十錢 郵税各八錢

發行所 春陽堂 日本橋通四丁目

ムスク香水

(大瓶壹圓●中瓶六拾五錢●小瓶二十五錢)

○本品は芳香の永く保つ點に於て無類の高評なり

東京日本橋區本石町四丁目
ホーサン石鹸本舗
本舗 松澤常吉
(電話本局[illegible])

謹賀新年
各女學校御用
附屬品幷に造花器械類一式

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話(長)浪花一六四三番

營業目録御入用なれば愛國婦人を見てと御書添へ御申越被下度候

愛國婦人廣告取扱

京橋區數寄屋橋外 弘報堂
神田三河町 博報堂
京橋區南紺屋町 一星堂
京橋區南鍋町 秀逸社
日本橋區上槇町 萬年社
日本橋區箱崎町 春風舍
京橋區宗十郎町 正路喜舍
京橋區日吉町 帝國通信社
同區彌左衛門町 京華社支店
同區南鍋町 廣告社

明治四十一年一月廿日發行(毎月五日二十日二回)(定價金三錢一ヶ月六錢 郵税不要廣告料一行金六拾錢)發行兼印刷人 山澤俊夫 編輯人 手島益雄 發行所 東京麹町區飯田町 愛國婦人發行所 印刷所 東京牛込區市谷加賀町 秀英舍工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國婦人第百二十號附錄

明治四十年一月廿日發行（毎月二回五日廿日）
明治三十五年三月二十七日（第三種郵便物認可）

愛國婦人會新年互禮會光景

發行兼印刷人　山澤俊夫　編輯人　手島益雄　發行所　愛國婦人會內愛國婦人發行所
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN